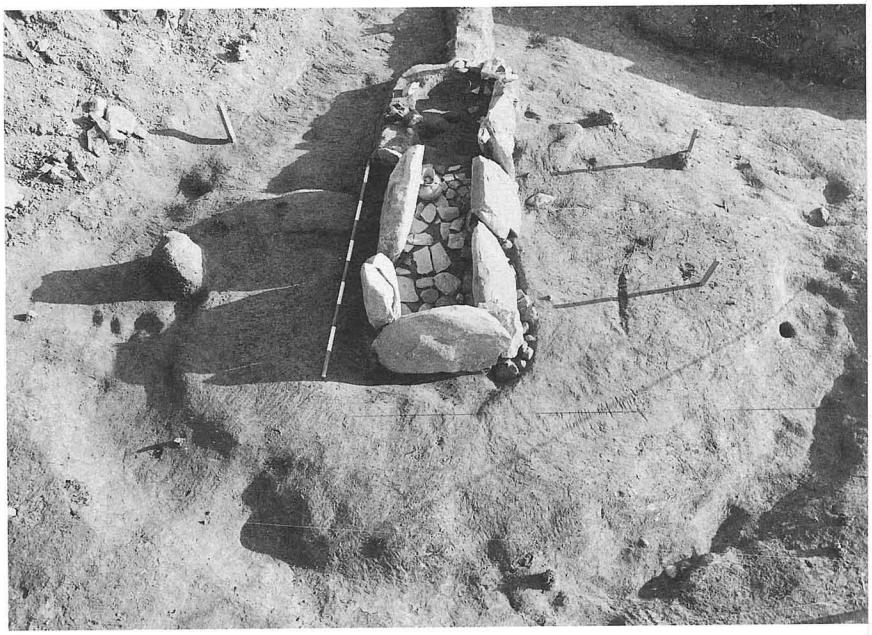
イガラビ５号墳
床面調査状況

イガラビ６号墳
調査前の状況

イガラビ６号墳主体部①
（北からみる）

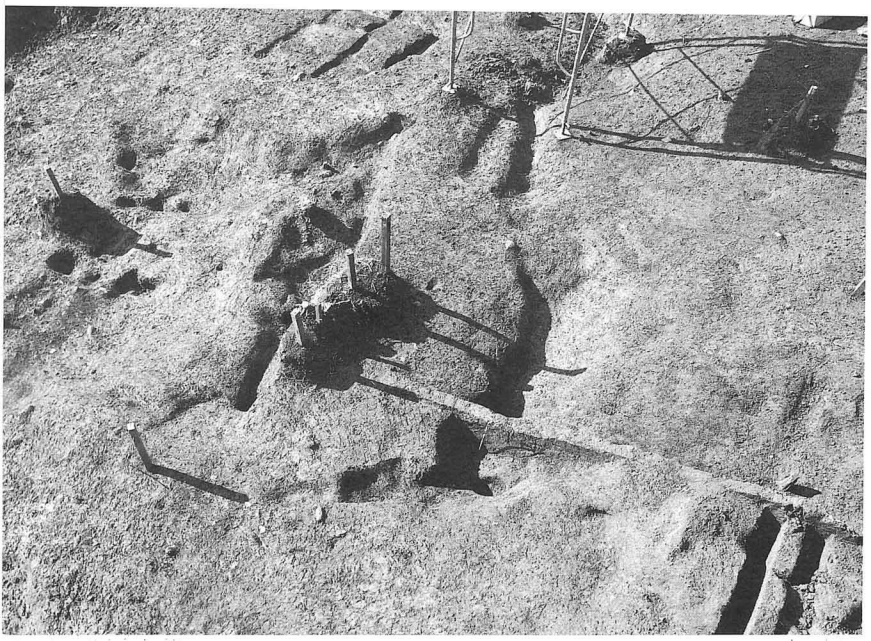
イガラビ６号墳主体部②
（北からみる）



イガラビ６号墳墳丘と石室
（北からみる）

イガラビ６号墳
石室の石組み

イガラビ６号墳調査後基盤



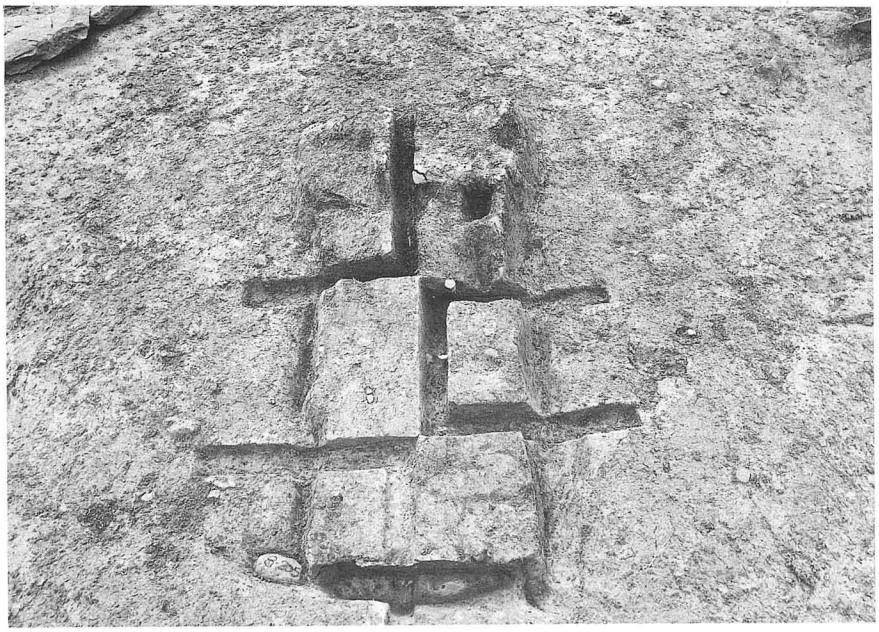
イガラビ７号墳調査後

イガラビ８号墳石室全景
（北からみる）

イガラビ８号墳
石室の石組み状況

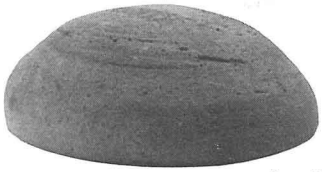
イガラビ８号墳
墳丘と主体部

イガラビ８号墳床石の状況



イガラビ８号墳
床面調査状況

イガラビ４～８号墳
調査後全景


A－19

A－22

A－37

A－21

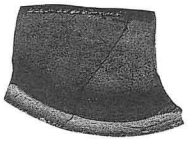
A－36

A－38

A－2

A－3

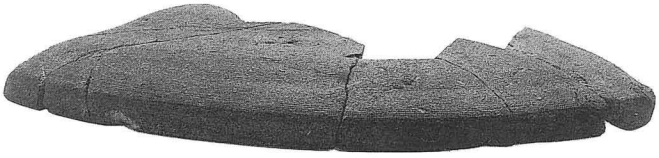
A－42

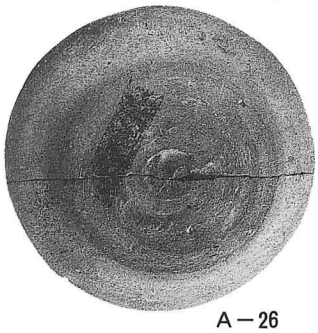

A－44

A－43

A－1

A－17

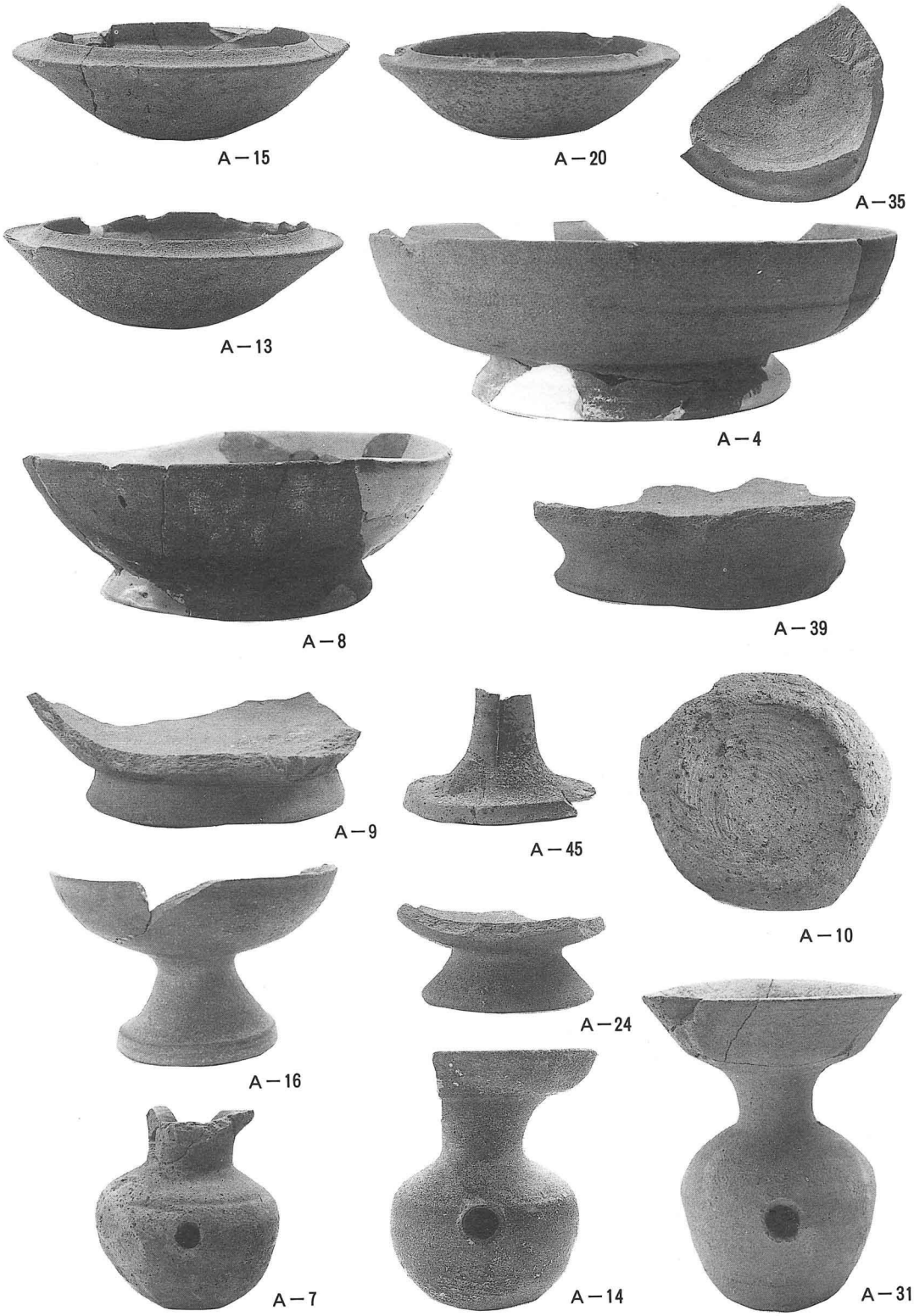

A－40


A－26

A－34

A－23

イガラビ１号墳出土遺物



イガラビ１号墳出土遺物

A－29

A－18

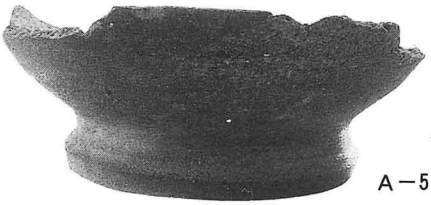
A－11

A－12

A－27

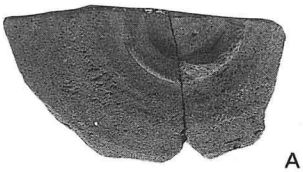
A－25

A－28



A－5

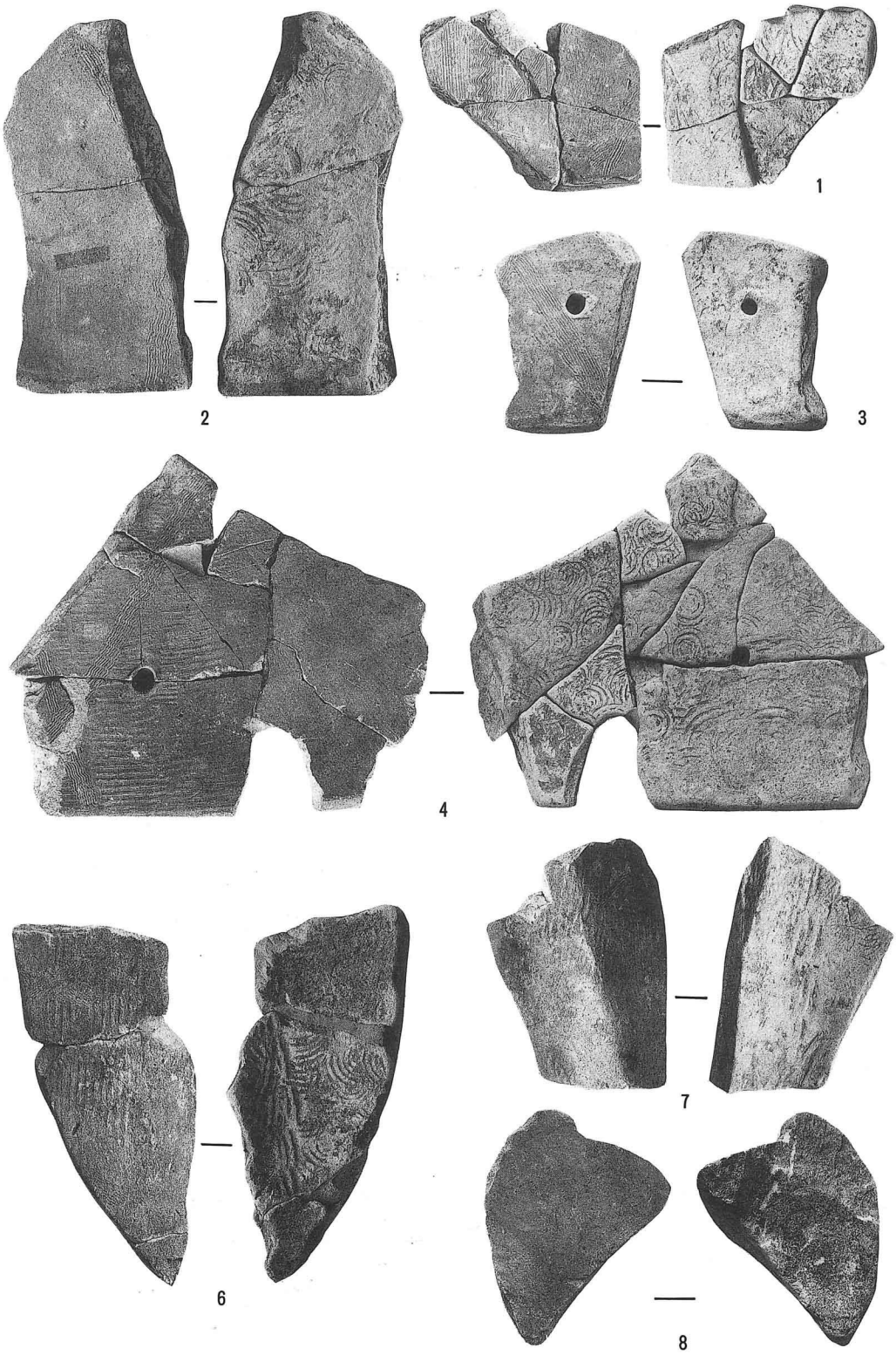
A－30



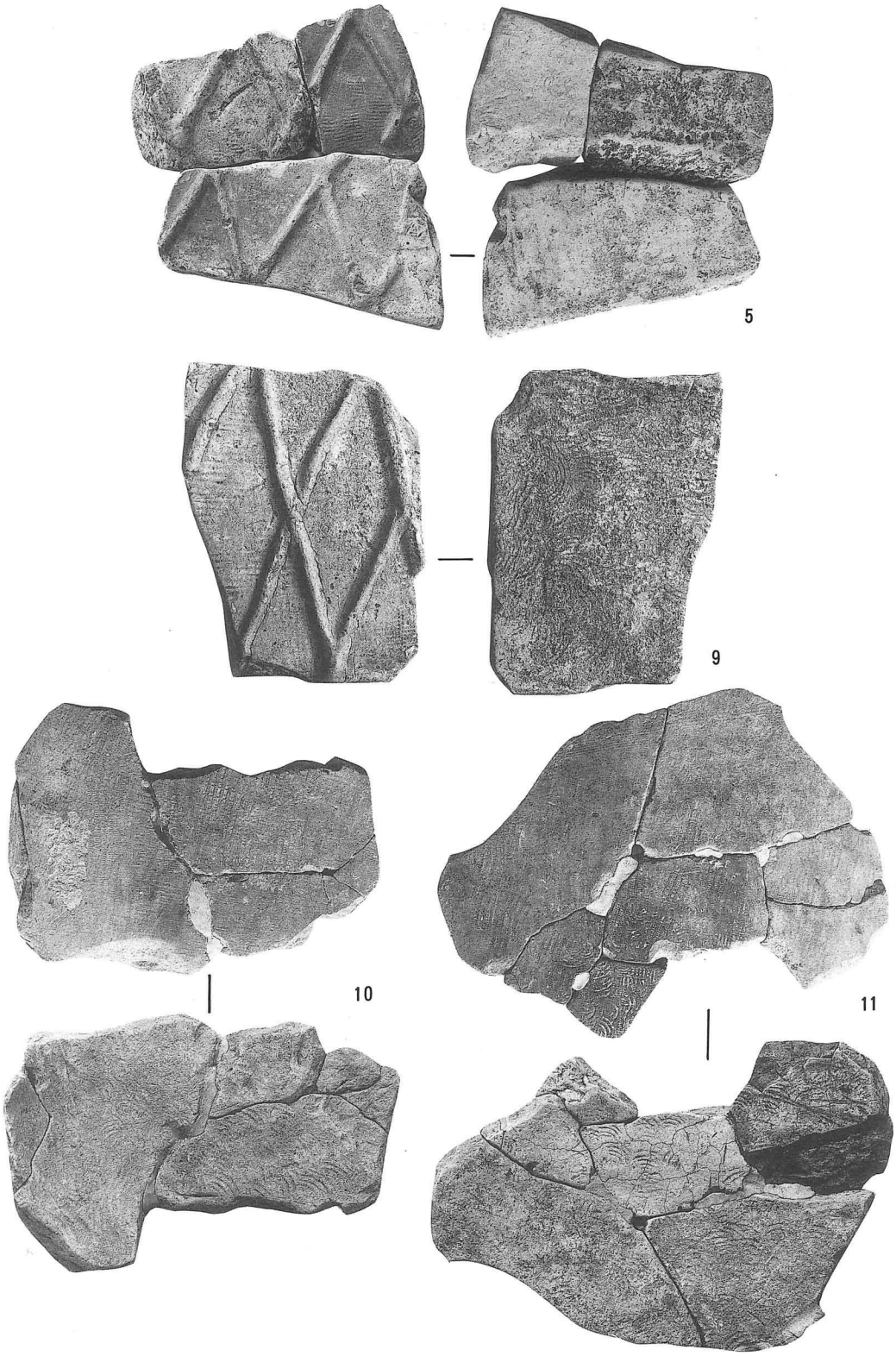
A－41

A－6

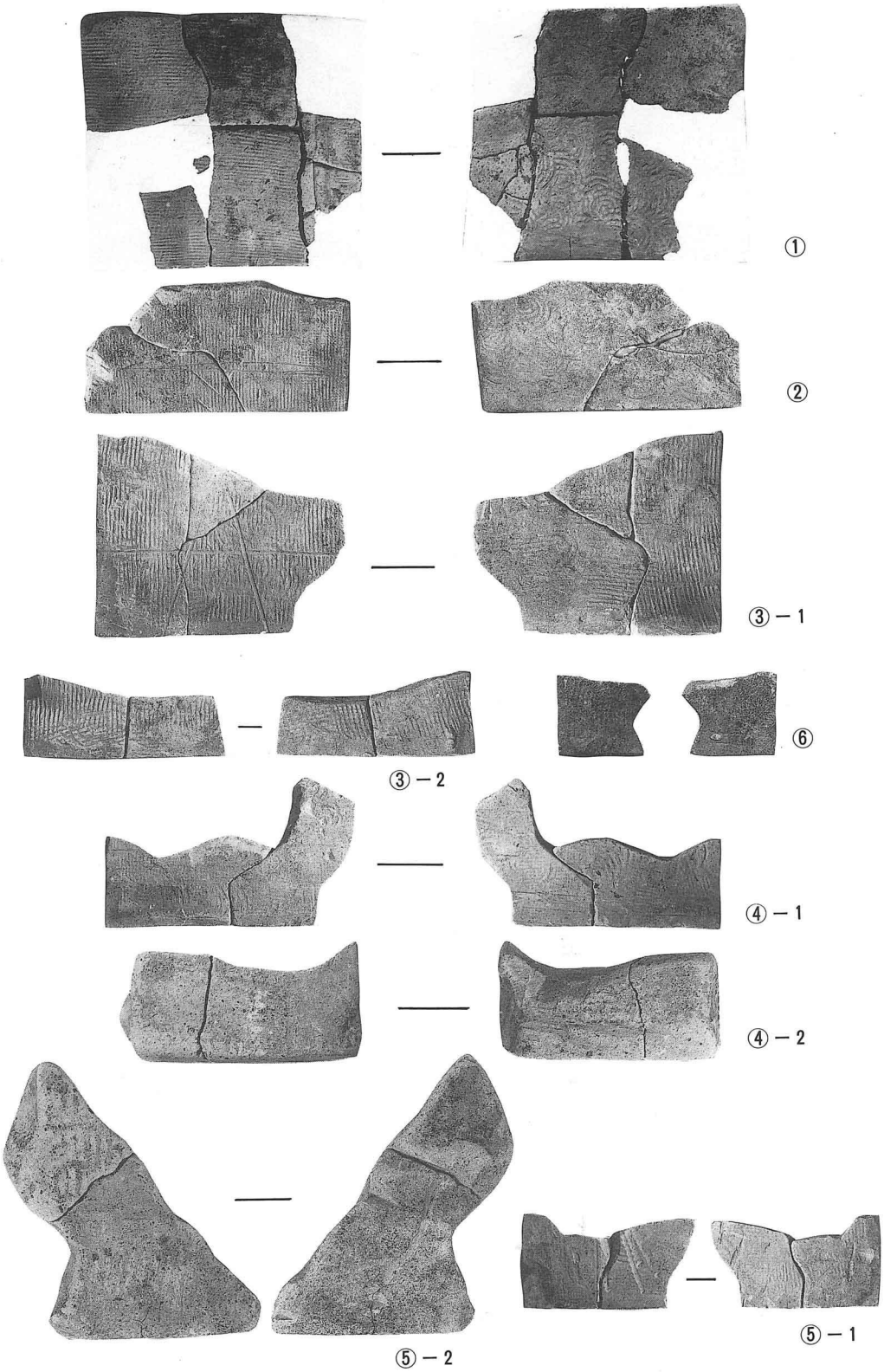
イガラビ１号墳出土遺物



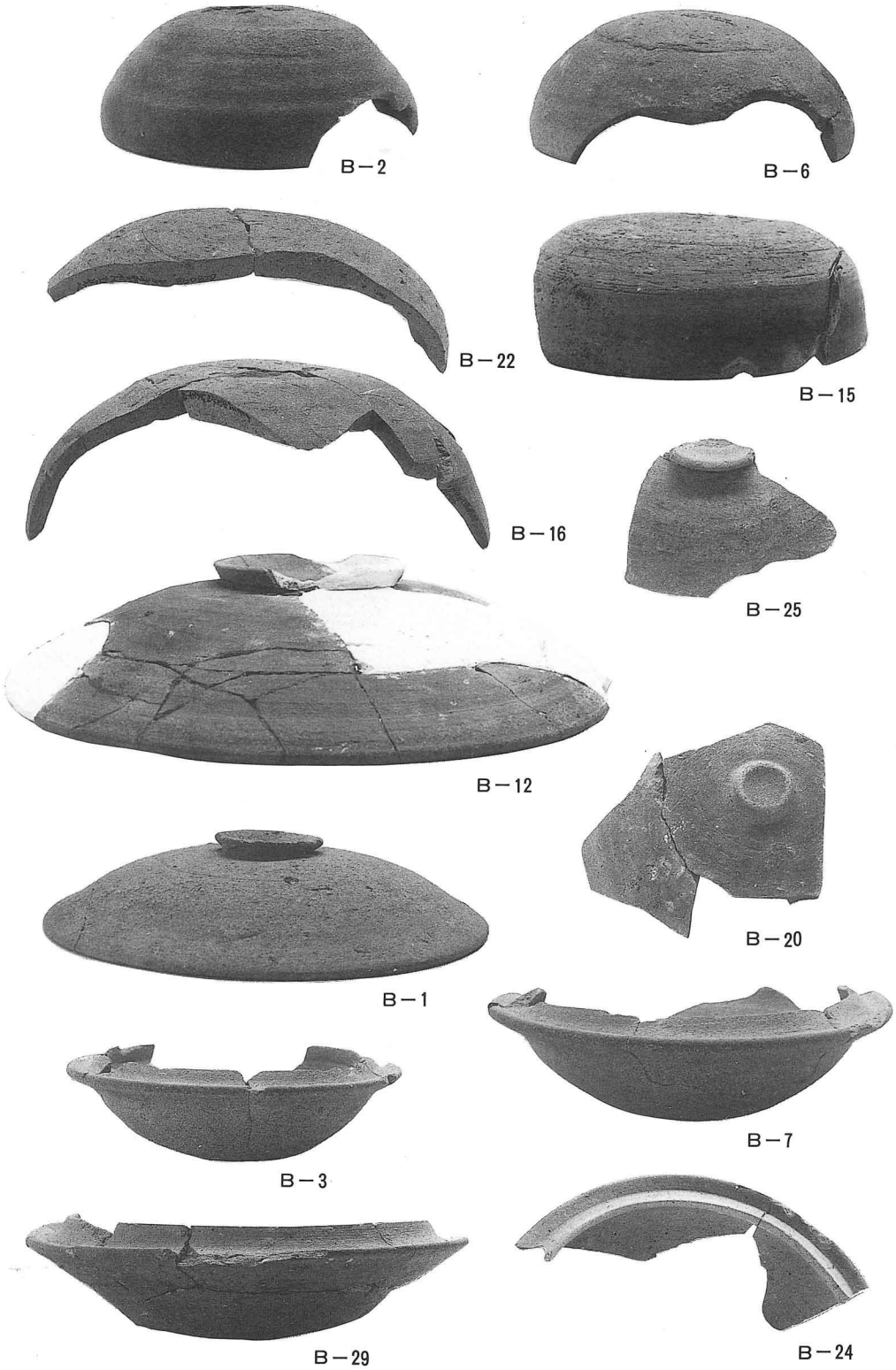
イガラビ１号墳出土陶棺片



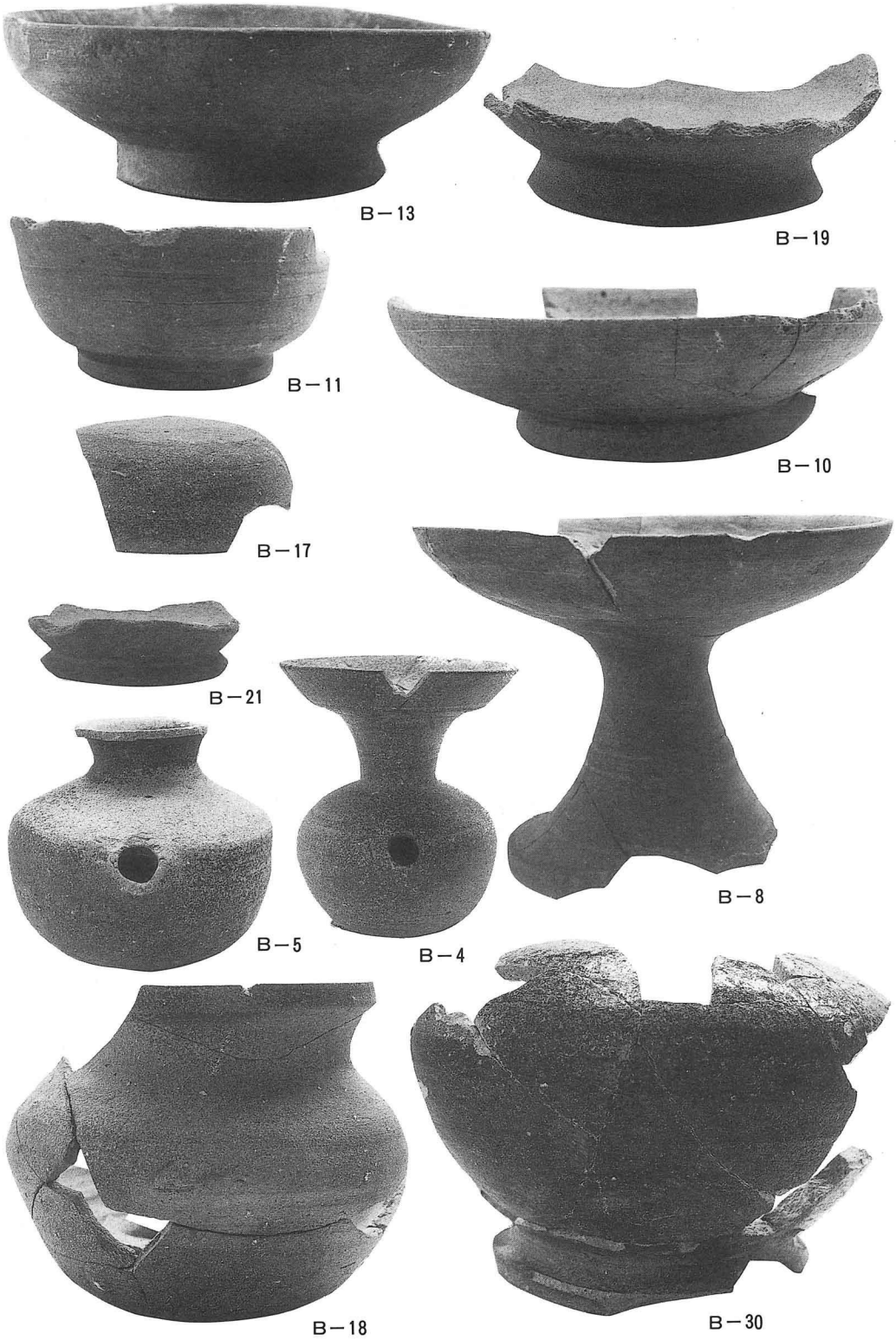
イガラビ１号墳出土陶棺片



イガラビ１号墳出土埴片



イガラビ２号墳出土遺物

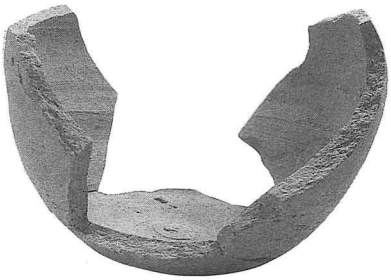


イガラビ２号墳出土遺物

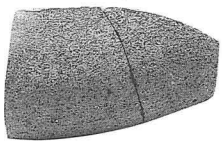
B－9

B－26

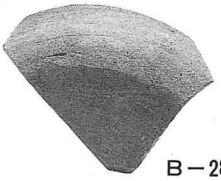
B－23



B－31

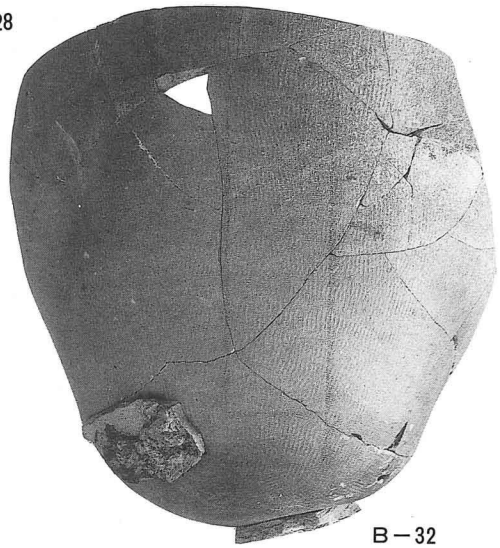


B－27



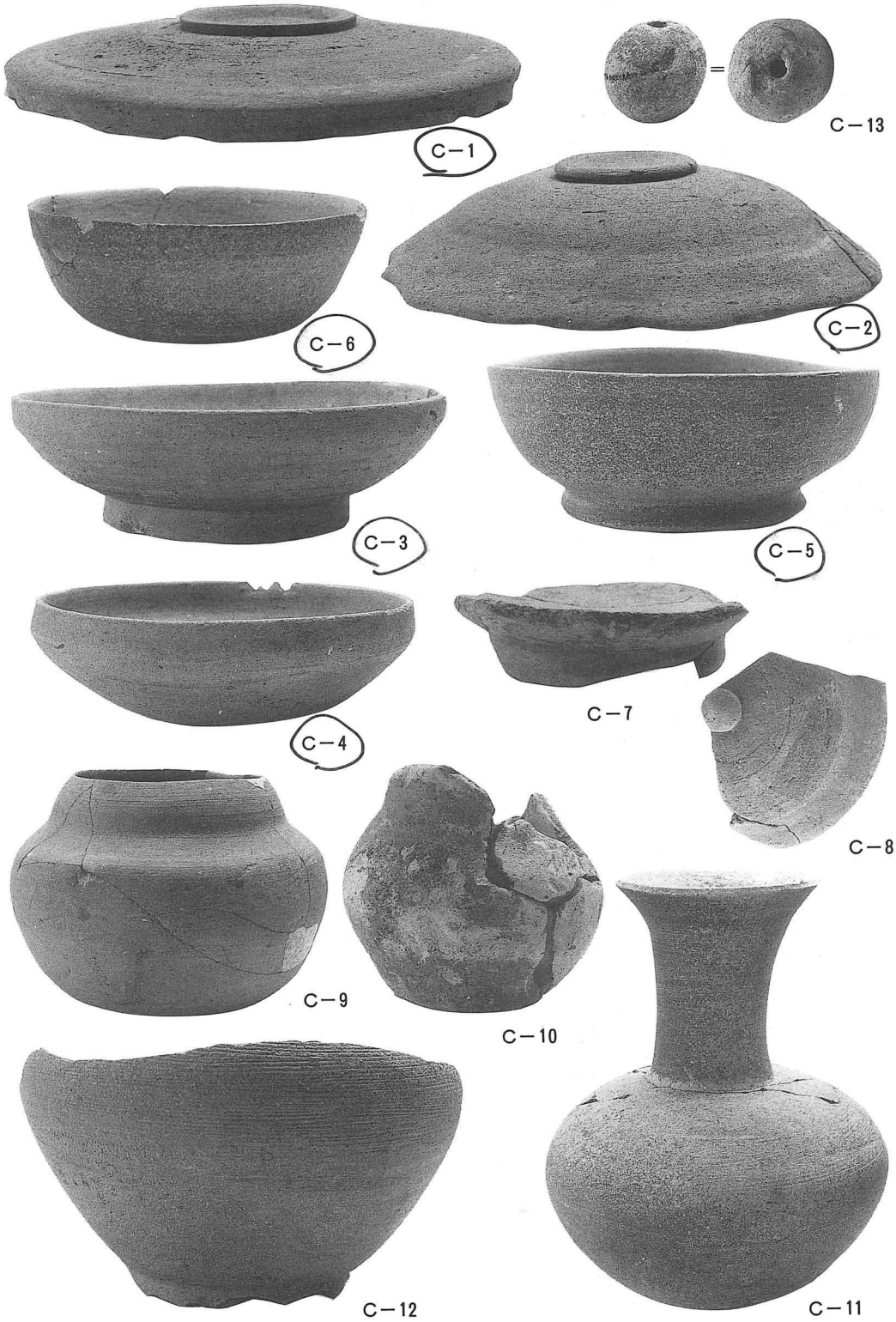
B－28

B－14

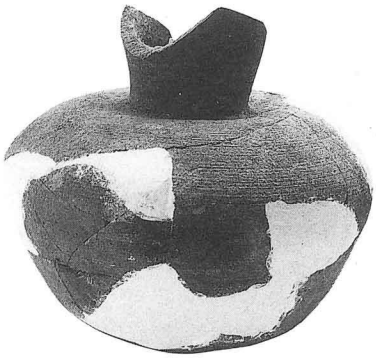


B－32

イガラビ２号墳出土遺物

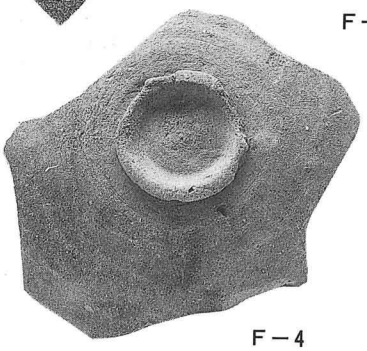


イガラビ３号墳出土遺物



C－14

F－3

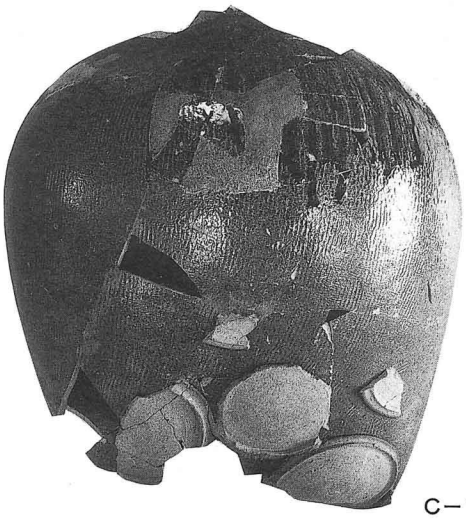


F－4

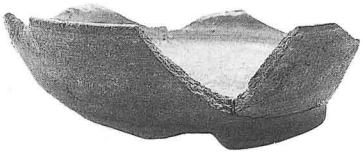
C－16

F－5

F－2



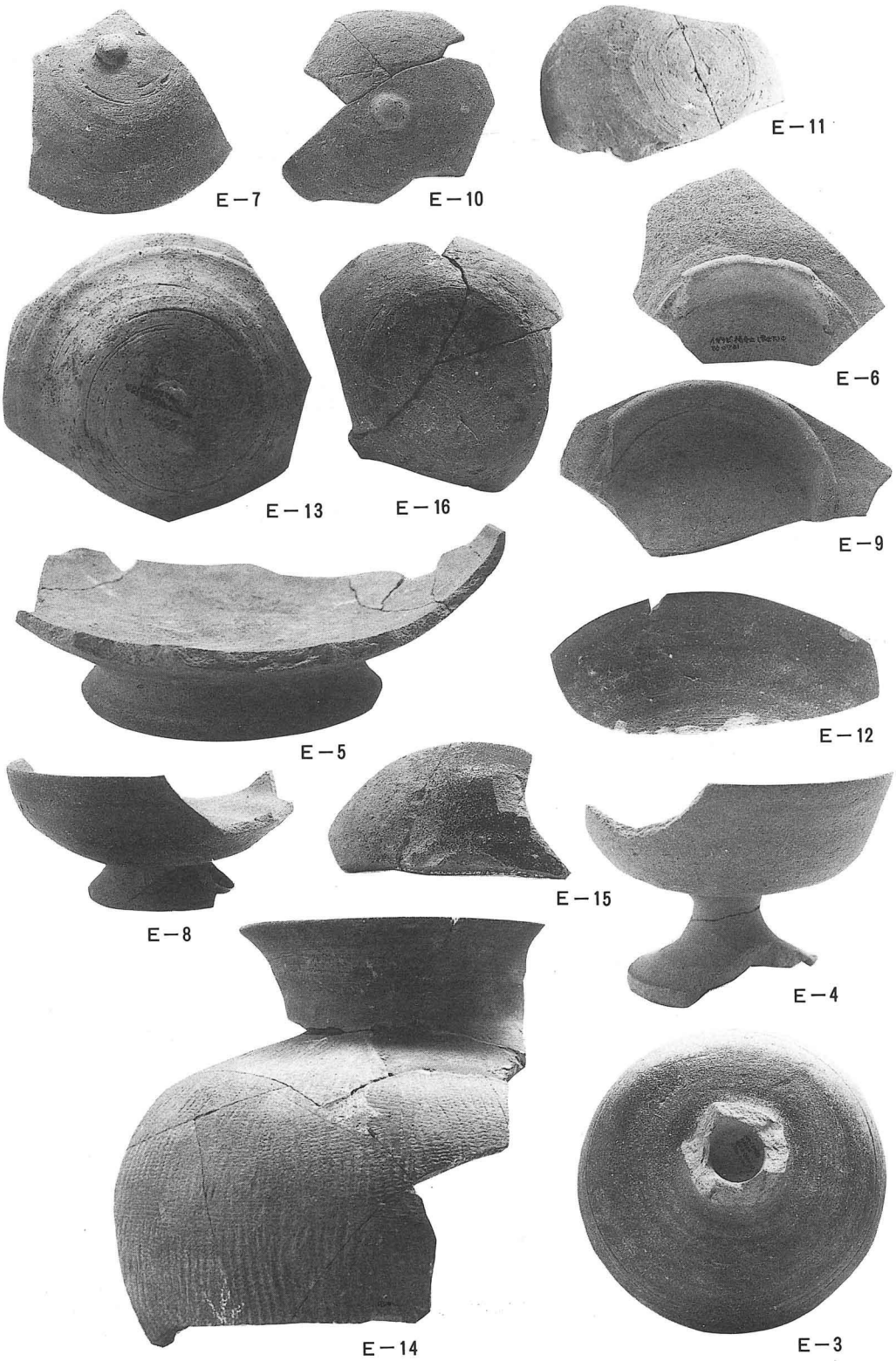
C－15



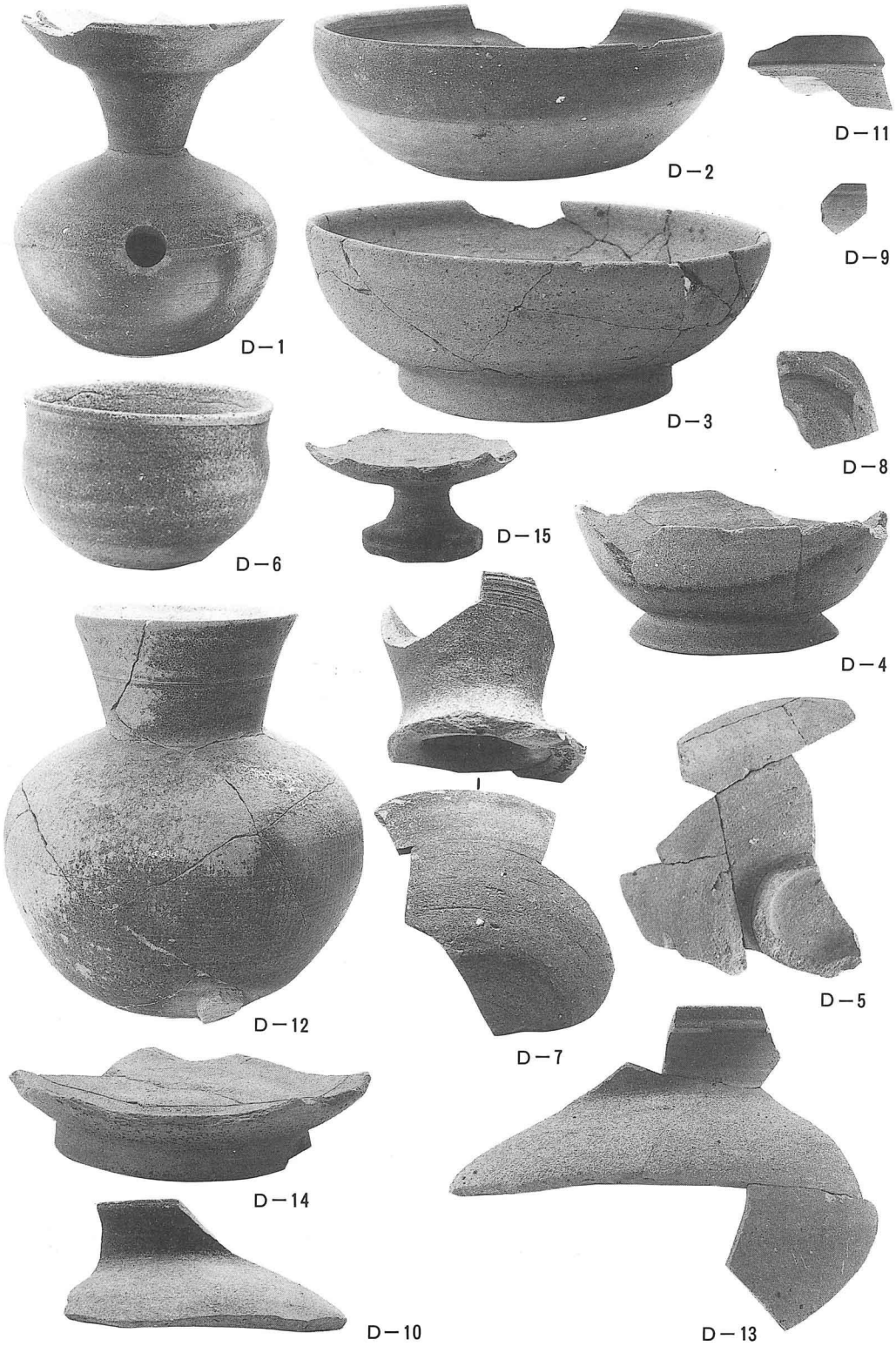
F－1

F－6

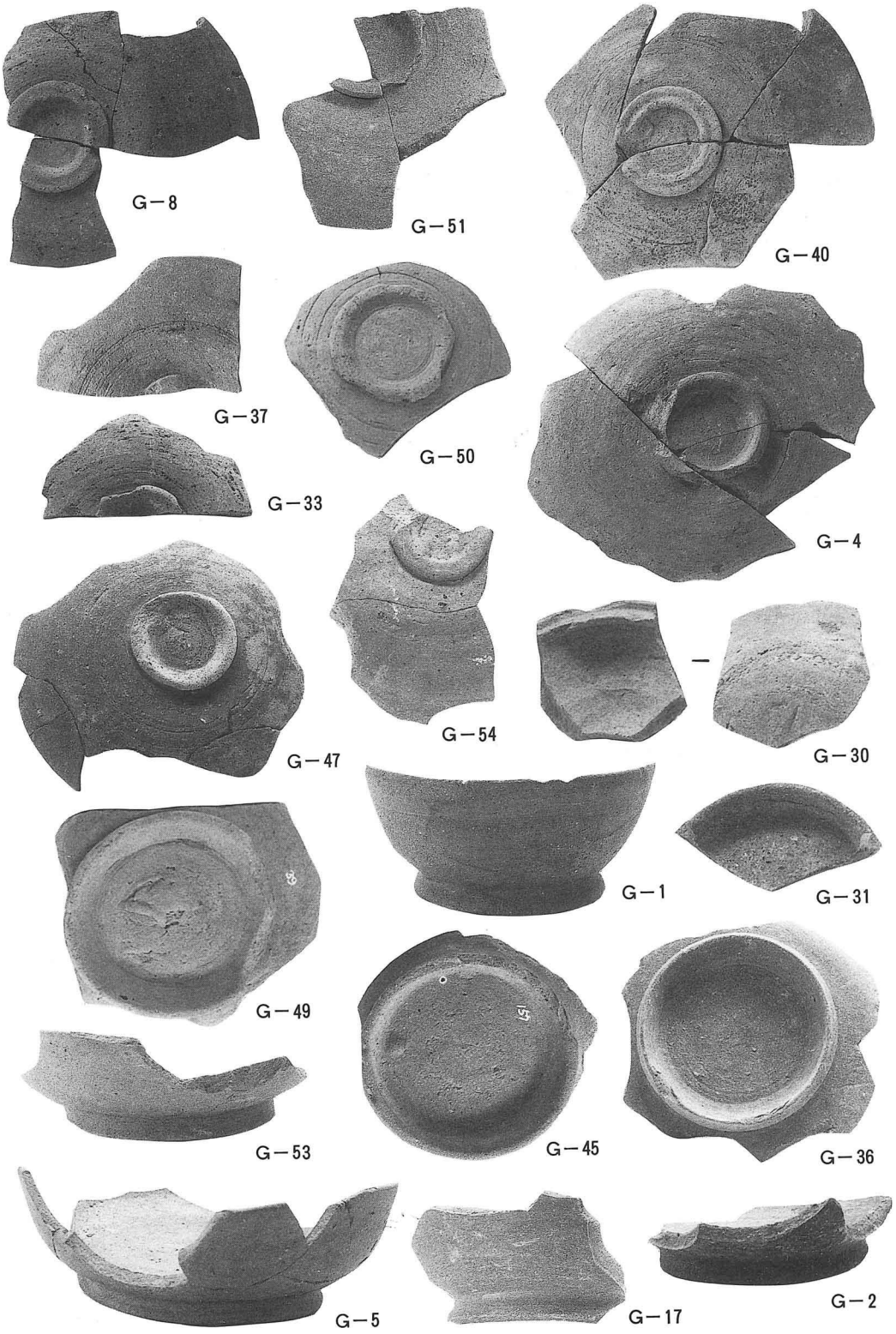
イガラビ３号墳，イガラビ１～３号墳北斜面出土遺物



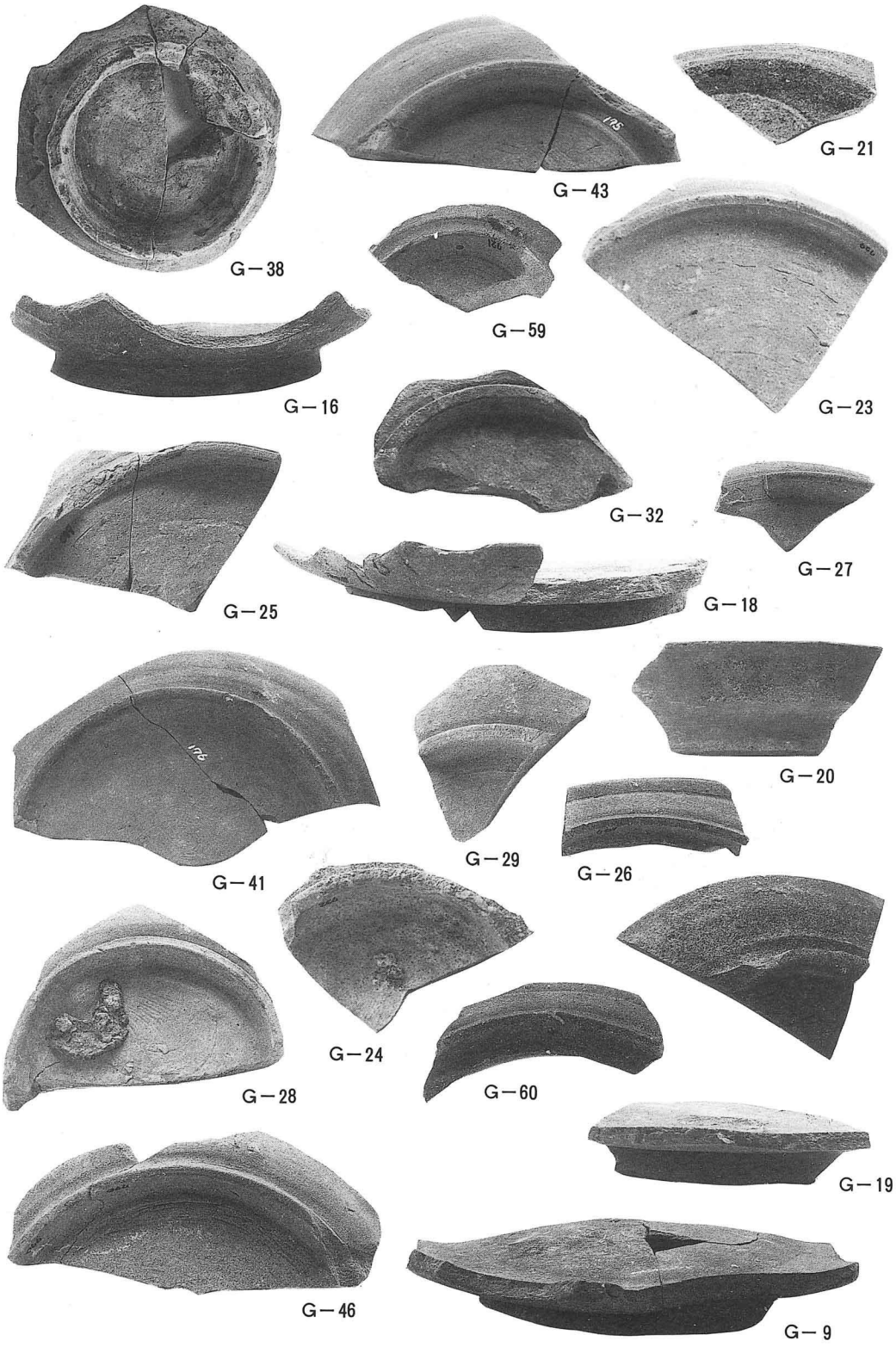
イガラビ１～３号墳南斜面出土遺物



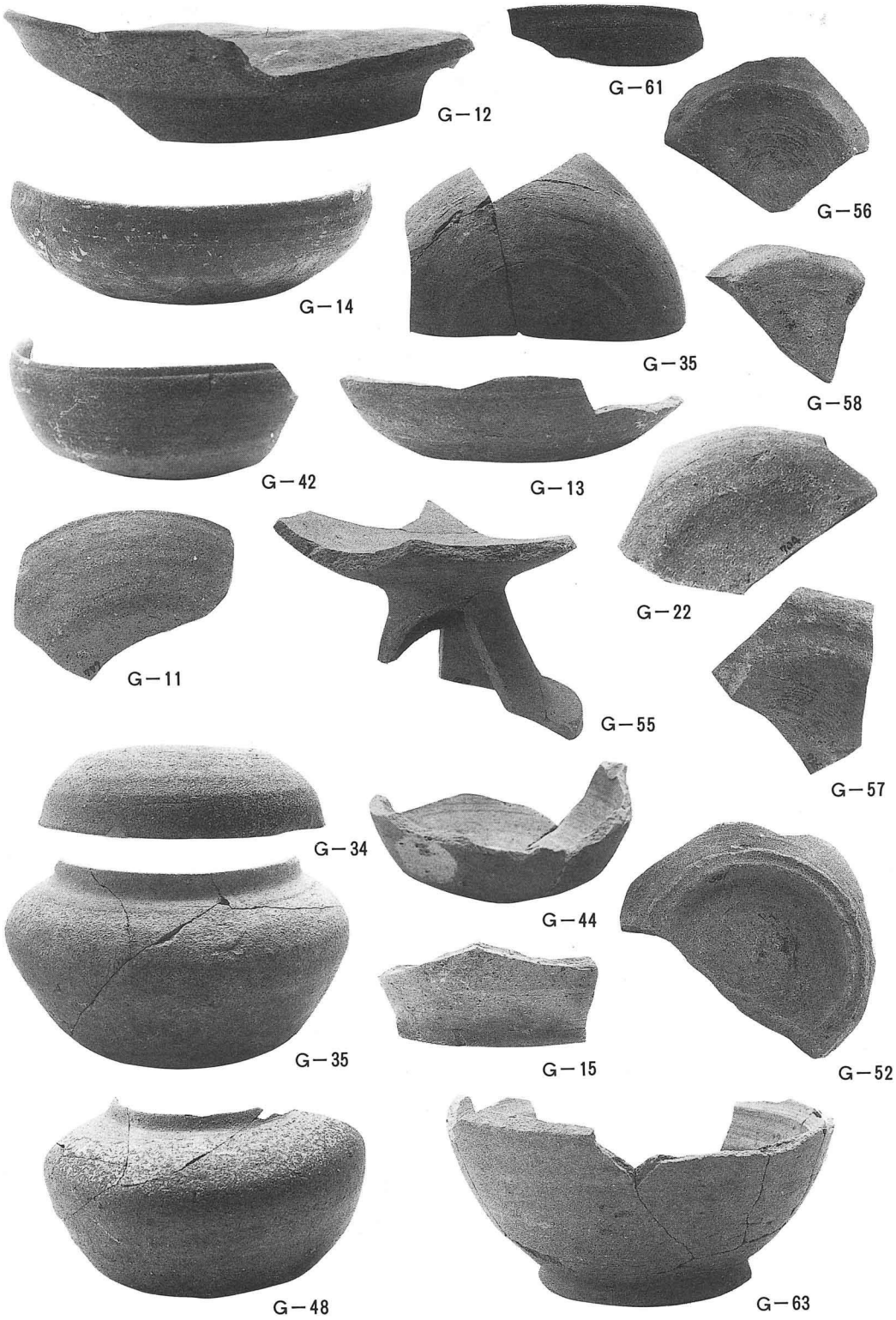
イガラビ４～８号墳出土遺物



イガラビ４～８号墳周辺出土遺物



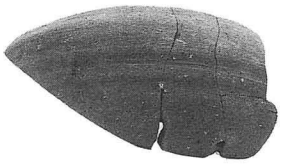
イガラビ４～８号墳周辺出土遺物



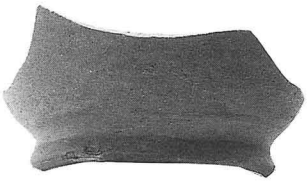
イガラビ 4～8 号墳周辺出土遺物

G－3

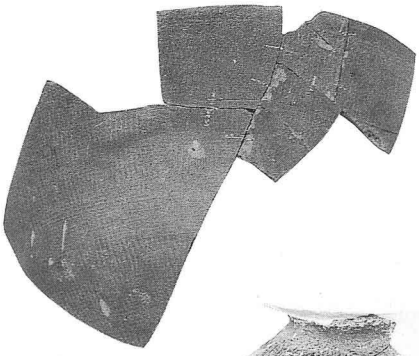
G－6



G－64



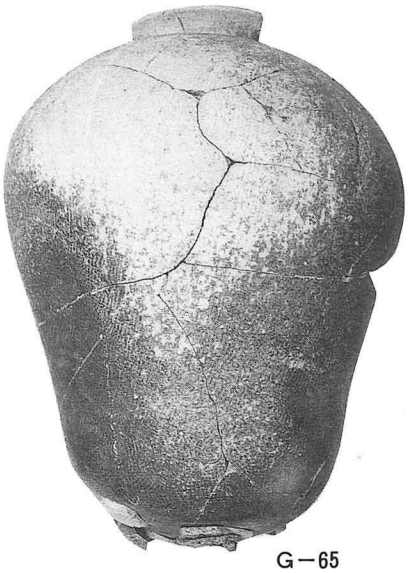
G－6



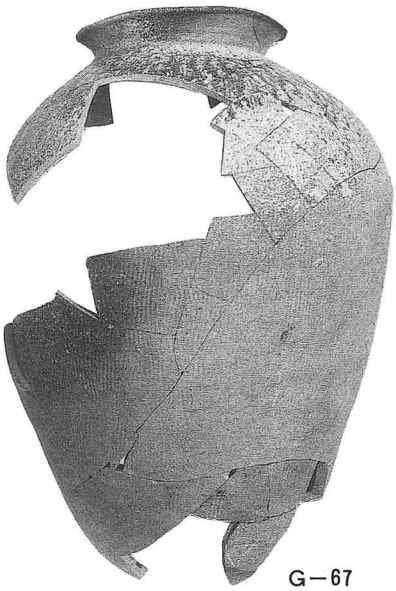
G－66

G－62

G－68



G－65



G－67

イガラビ４～８号墳周辺出土遺物

池ノ奥古墳群

池ノ奥古墳群

1. 位置と調査の概要

池ノ奥古墳群は、松江市大井町字池ノ奥909・1286・1286続２に所在する。イガラビ４～８号墳の所在する緩斜面の丘陵から南東に85m隔てた，標高43mの丘陵突端に池ノ奥１号墳があり，更に東に15m下った，標高38mの斜面に池ノ奥２号墳が所在する。

本古墳群は昭和62年度中に全ての調査をおこなった。以下，各古墳について調査の概要を報告する。

2. 池ノ奥１号墳

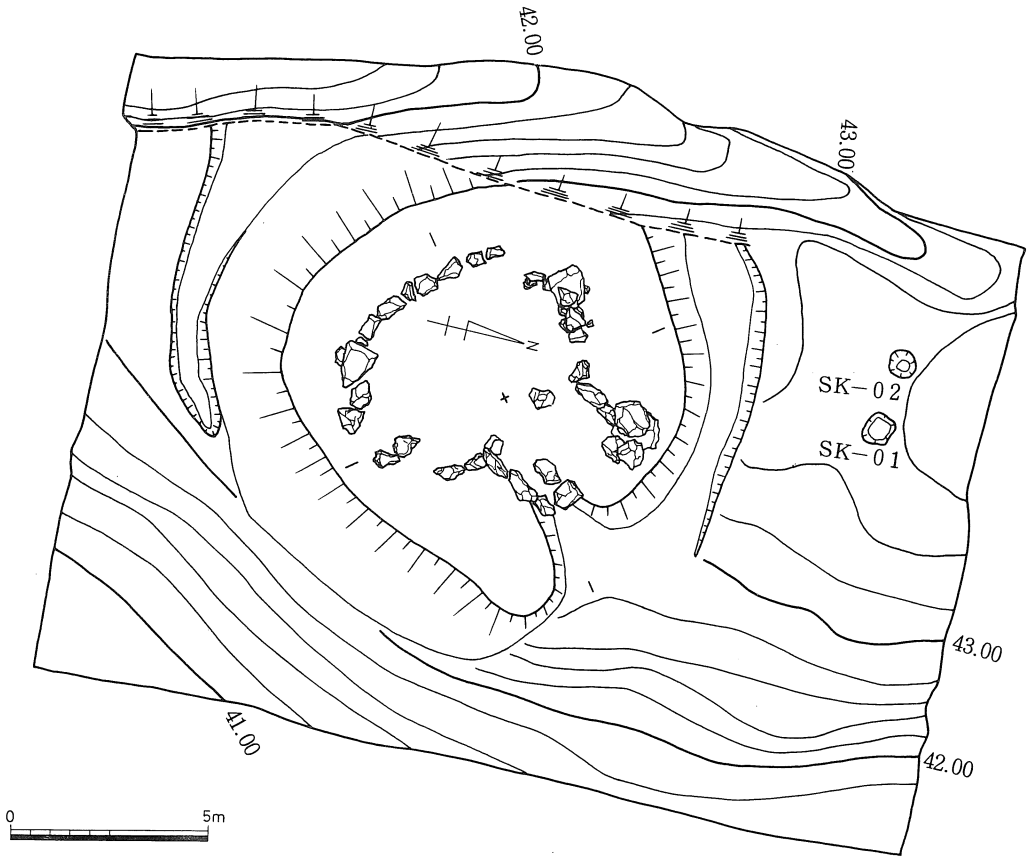
位置と現状　イガラビ６号墳から南東に85m下った，標高43mの丘陵突端に位置する。

調査前，墳頂部には径1.1～1.9m，深さ1.0mの盗掘壙が開いており埋葬施設はほとんど遺存していないのではないかと思われたが，盗掘時の攪乱土を取り除くと石室や石棺にしてはやや小振りのふぞろいな割石が横長の方形プランに斜めに入口を設けた形に並んで検出された。

床面を精査した結果，ならんだ石の内側に大きな石の抜き取られた跡を検出したので，主体部は横穴式石室であり，石は裏込めに使われたものらしいことがわかった。

墳　丘　南側は後世の山道で削られているが平面形は一辺12×10mの略方形を呈し，盛土の現存高は約１mを計る。丘陵上の最も高い部分がやや東に下がり気味に切削加工されているので，これが墳丘基盤であると考えらる。その中央部に石室の堀り方があり，玄室の横幅3.3m，奥行き2.65m，深さ0.2～0.4mを計る。羨道部の横幅2.5m，長さ1.7mを計る。盛土は第一段階として石室の裏込めに橙色系統の土を詰め，第２段階として灰褐色や赤褐色を順次盛っていき，最終段階に明褐色土をかぶせている。

周溝は墳丘の西部と南東部に顕著に認められた。西部では上端幅1.5～2.3m，下端幅0.6～1.5m，深さ0.2m，南東部では上端幅1.0m，下端幅0.5m，深さ0.1mを計る。

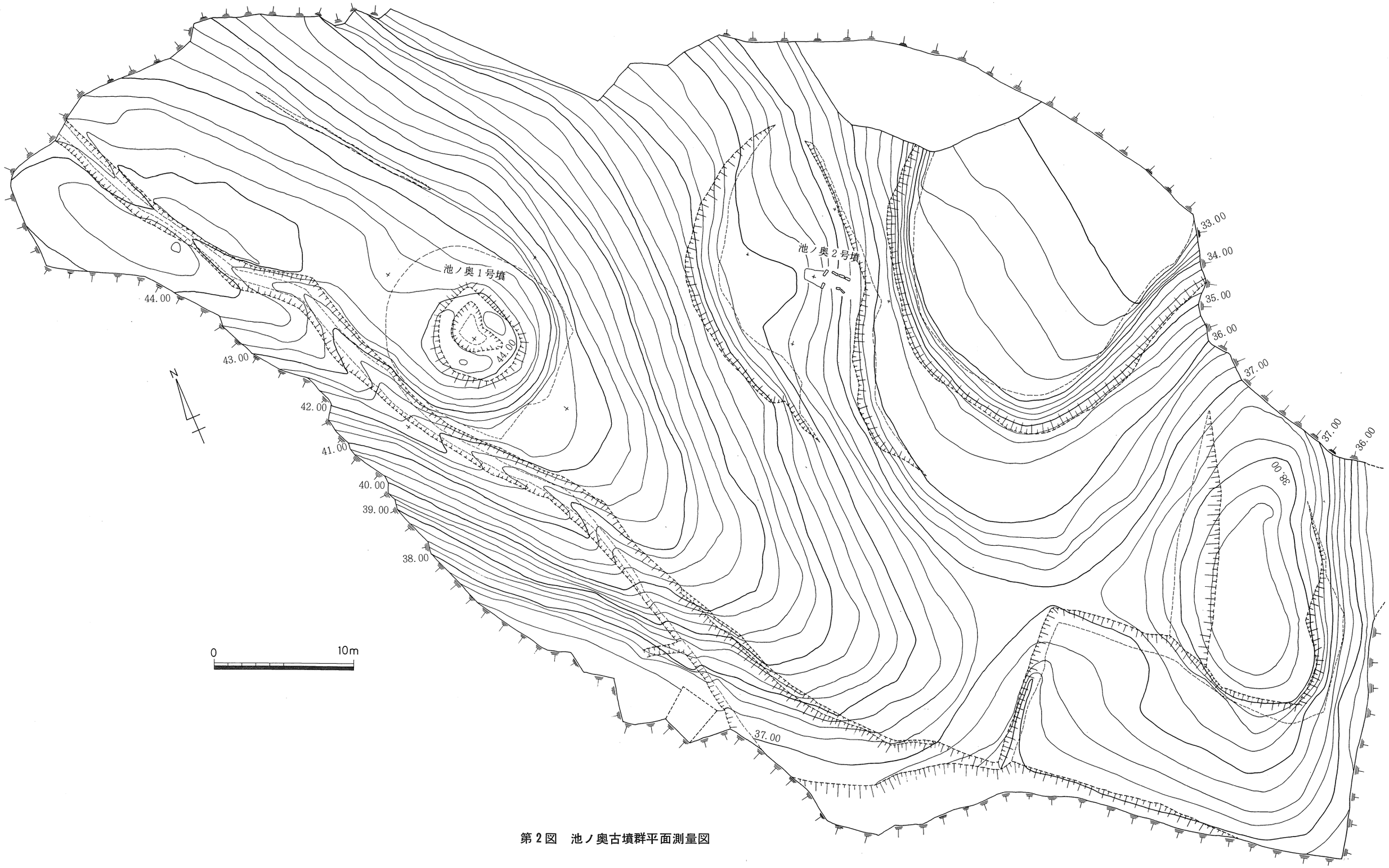


第１図　池ノ奥１号墳調査成果図

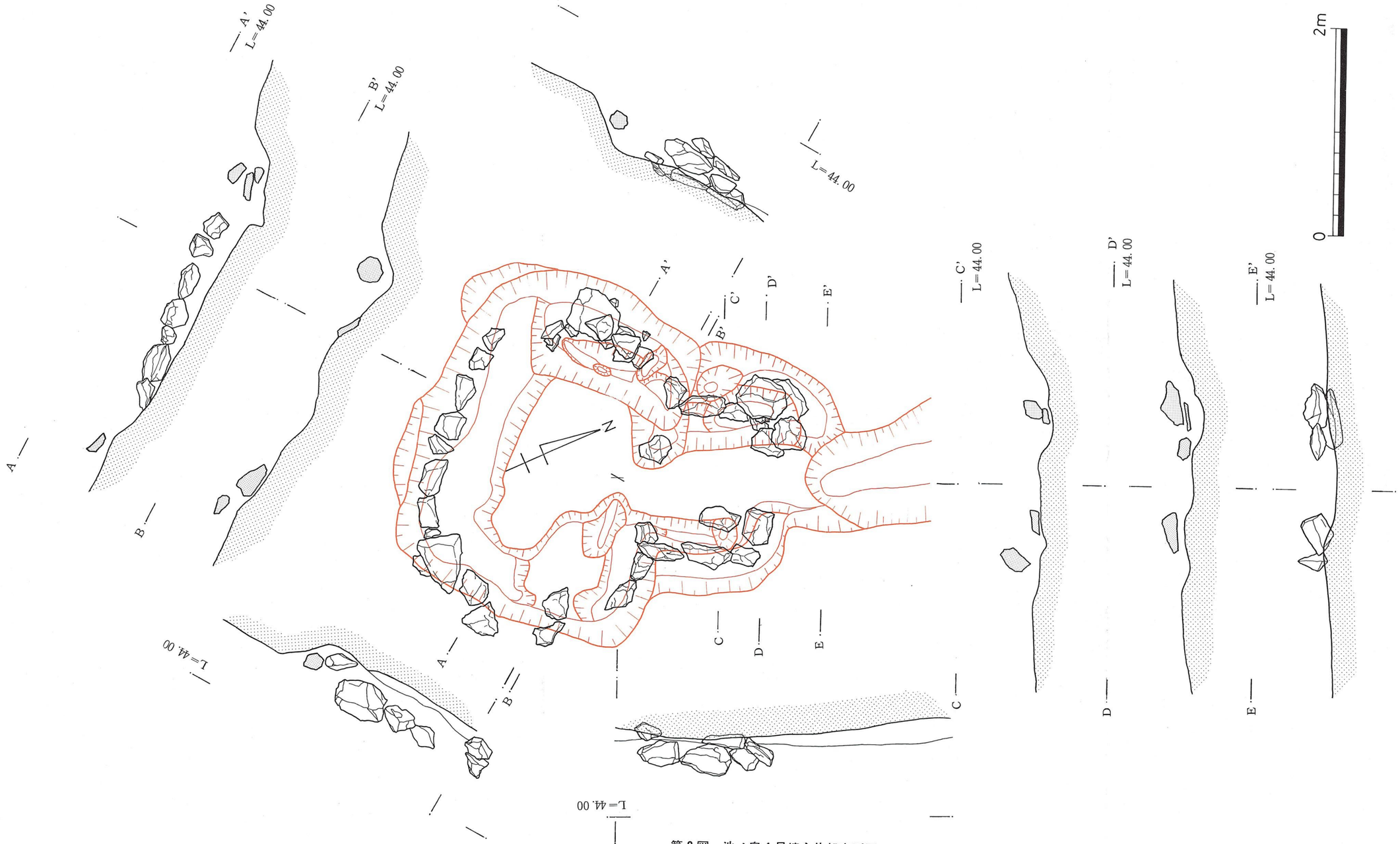
主体部　抜き取られた腰石の痕跡の内法から推定すると玄室は縦１m，横1.8m，高さは不明である。羨道部は玄室中心線に対して29°西に振れている。幅は0.7m，長さは1.3mを計る。N1.5°Wの方向に開口している。前庭部は，外方へ「ハ」の字形に開き，北に向かって緩やかに傾斜して下る。

出土遺物　遺物は，墳丘では盛土上面より多量の甕片が特に墳裾に集中して出土した。玄室内では，堆積した攪乱土の中から陶器片（明治），貝殻，須恵器甕片，７世紀以後の坏片，高坏の脚端部等が出土している。前庭部では，生焼けの子持壺，渡銀環をはじめ，蓋坏，高坏，甕片等が混在して多量に出土した。また，堆積土中より数百片もの甕片が出土している。

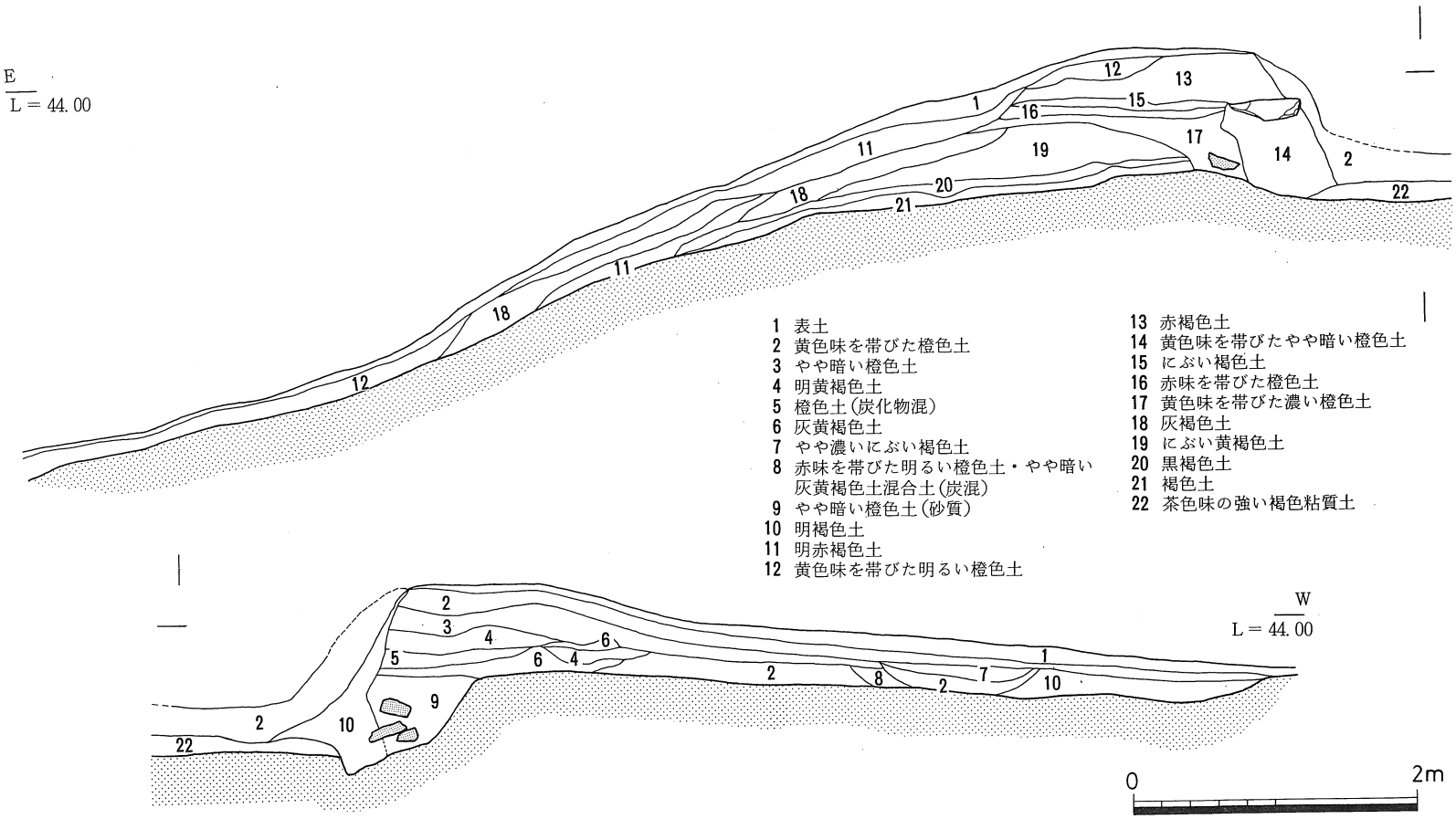
坏蓋　Ｉ－４は前庭部から出土した。口径10cm，器高３cmで切り離しは回転ヘラ切りである。全体にナデて仕上げている。Ｉ－９は坏蓋でかえりのつく小型のもの。口径8.3cm，



第2図　池ノ奥古墳群平面測量図

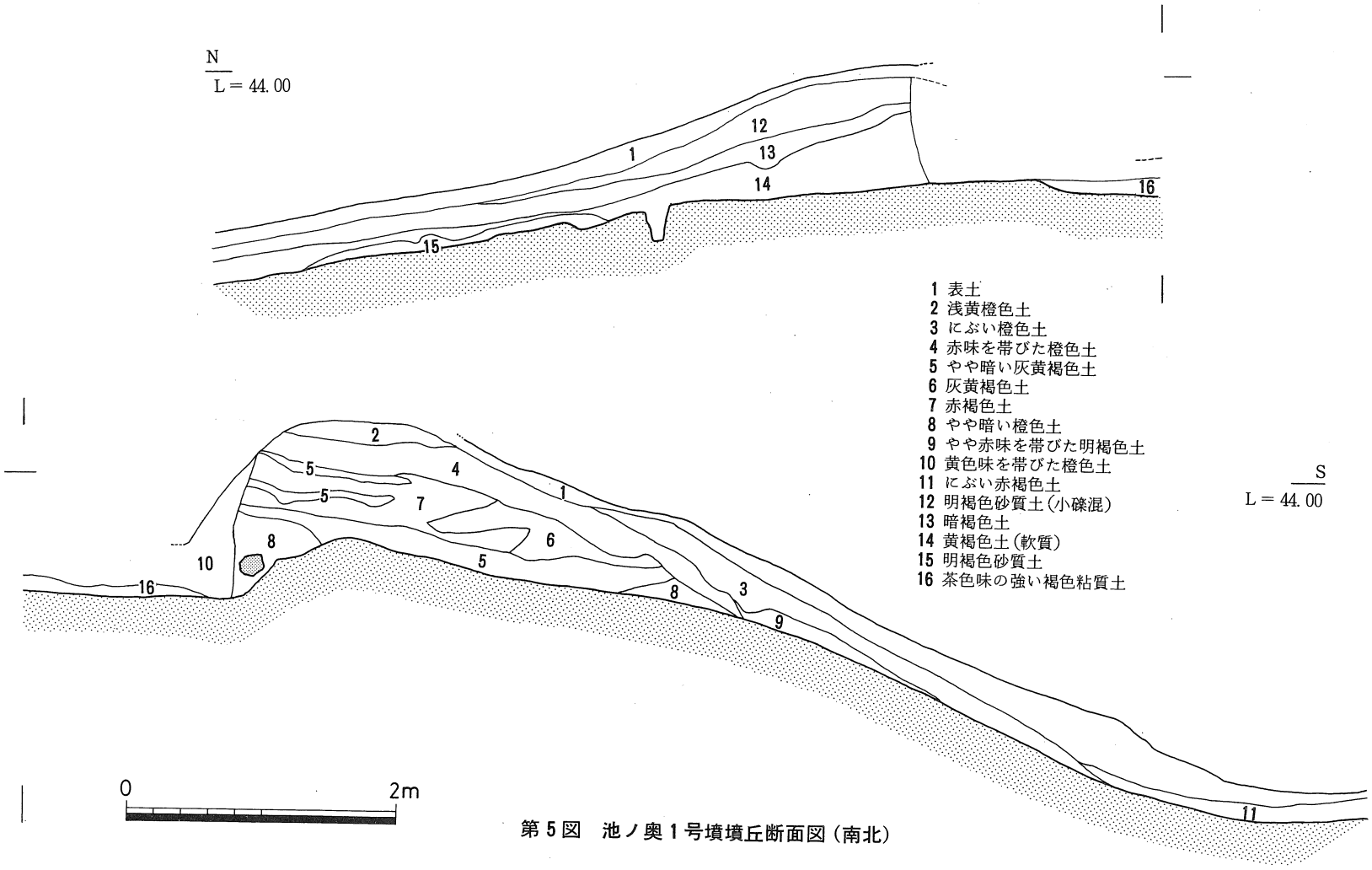


第３図　池ノ奥１号墳主体部実測図



1 表土
2 黄色味を帯びた橙色土
3 やや暗い橙色土
4 明黄褐色土
5 橙色土(炭化物混)
6 灰黄褐色土
7 やや濃いにぶい褐色土
8 赤味を帯びた明るい橙色土・やや暗い灰黄褐色土混合土(炭混)
9 やや暗い橙色土(砂質)
10 明褐色土
11 明赤褐色土
12 黄色味を帯びた明るい橙色土
13 赤褐色土
14 黄色味を帯びたやや暗い橙色土
15 にぶい褐色土
16 赤味を帯びた橙色土
17 黄色味を帯びた濃い橙色土
18 灰褐色土
19 にぶい黄褐色土
20 黒褐色土
21 褐色土
22 茶色味の強い褐色粘質土

第4図　池ノ奥1号墳墳丘断面図(東西)



第5図　池ノ奥1号墳墳丘断面図(南北)

かえり径6.3cm，器高1.7cm。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。Ⅰ－5は前庭部より出土。口径13cm，器高4.7cm。外面に2本の明瞭な沈線がめぐり，沈線の間は稜となっている。口唇部内面にも沈線が1本めぐる。天井部外面，回転篦削り。全体にナデて仕上げている。Ⅰ－3は前庭部より出土。口径7.5cm，受部径10.1cm，器高2.8cm。口縁部は短く内傾し，受部端よりも低い。底部外面に回転ヘラ削りを施している。擬宝珠状のつまみがついていたものが欠損したものと思われる。Ⅰ－11は盗掘壙内の攪乱土中より出土。口縁部の小破片である。推定口径14.2cm，現存高1.5cm。端部近くで下方に屈曲して，ほぼ垂直に下がり端部に至る。

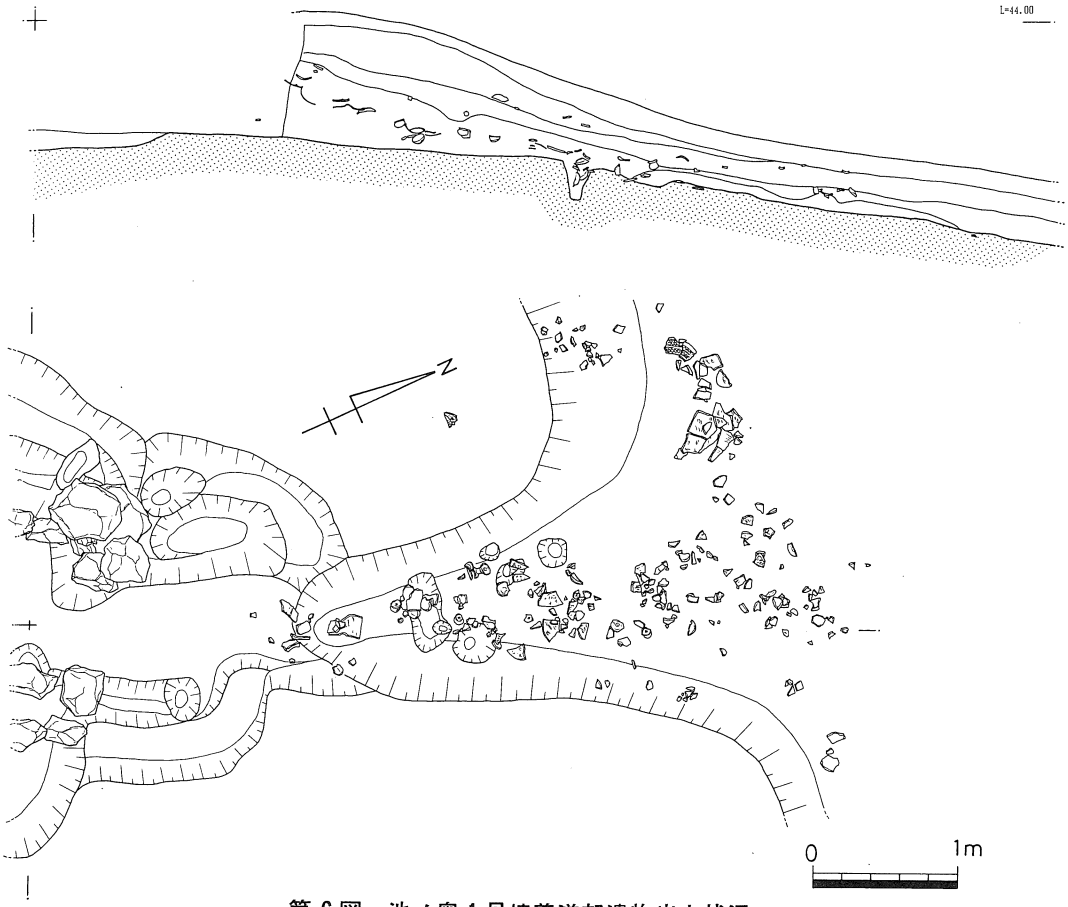
坏身　Ⅰ－1・2は前庭部ピット中より出土。Ⅰ－2は口径8.7cm，受部径10.8cmを計る。口縁端部は受部より高く出る部分と水平な部分とがある。底部は回転ヘラ切りで全体にナデて仕上げている。Ⅰ－1は口径9cm，器高3.6cm。天井部外面に回転ヘラ削りを施している。Ⅰ－54も前庭部より出土。口径11cm，受部傾13.6cm，たちあがり口1.2cm，現存器高4cm。たちあがりは内傾し，受部はやや外方に伸びる。Ⅰ－6は坏と思われる。前庭部より出土。生焼けの須恵器で橙色～えび茶色を呈す。口径9cm，器高3.9cm。口縁部はやや外反する。切り離しは回転ヘラ切り。

高坏　高坏はⅠ－7・21・32～37・44・20の合計10個体が検出された。Ⅰ－7は高坏の坏部片で，前庭部より出土した。口径13.6cm，現存高4cm。口縁部と底部の境に沈線がめぐり，その直下が稜をなしている。Ⅰ－34は高坏の脚部片であ。前庭部より出土。底径11.4cm，現存高5.1cm。三方一段透かしで，透かし孔は三角形。脚部端は段を持つ。Ⅰ－32～34は脚部に三方一段の透かしを有するもので，Ⅰ－32・33は有蓋高坏である。これらの蓋とみられるものがⅠ－23で，高い環状のつまみを有している。

壺・甕類　南側の墳裾の堆積土中に多く検出された。甕片の一部は南斜面から谷底にあたるイガラビ遺跡周辺まで落ちているものもあった。これらの中には口径45cm以上になると思われる大型の甕口縁部片もあり，30個体以上になるものと思われる。

子持ち壺　3個体分出土した（Ⅰ－82・83・84）。明褐色を呈する生焼けのものである。Ⅰ－82は推定高約56cm，親壺高25cm，脚部高31cmを計り，4方向に子壺を付ける。親壺の底は検出されなかったが，脚部との接合部に突帯を残す。子壺の底部はいずれも穿孔されている。

①　親壺の口縁部から脚部上半部にかけての破片が接合する。口縁部は，幅1.7cmの段を設けて外側に肥厚させる。肩部には，四方向に子壺を粘土で補強して付けた後，子壺の



第６図　池ノ奥１号墳羨道部遺物出土状況

底部に親壺と共に直径1.2～1.4cmの円孔を穿がつ。子壺は推定口径5.5cm，推定器高34.5cmを測り，単純口縁で肩部にややアクセントのあるもの。

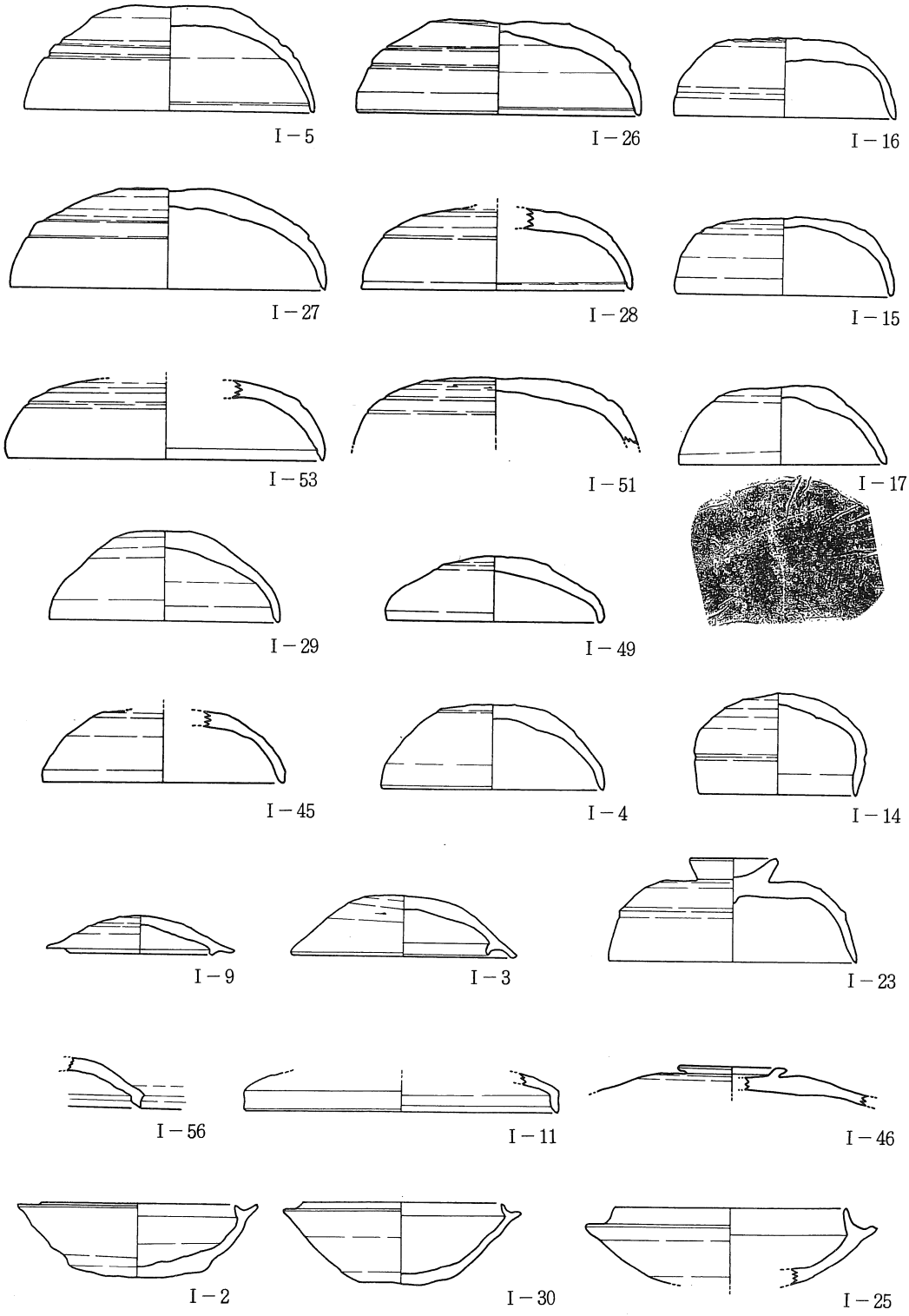
親壺胴部の内外面は風化著しく不明瞭だが，外面の一部には斜方向の平行叩きの調整痕が認められる。

親壺と脚部の接合部は，外傾させた脚部の上端部の上に親壺底部を外反させたのせたもので，外面は突帯状を呈するが内面は接合面を殆ど調整していない。

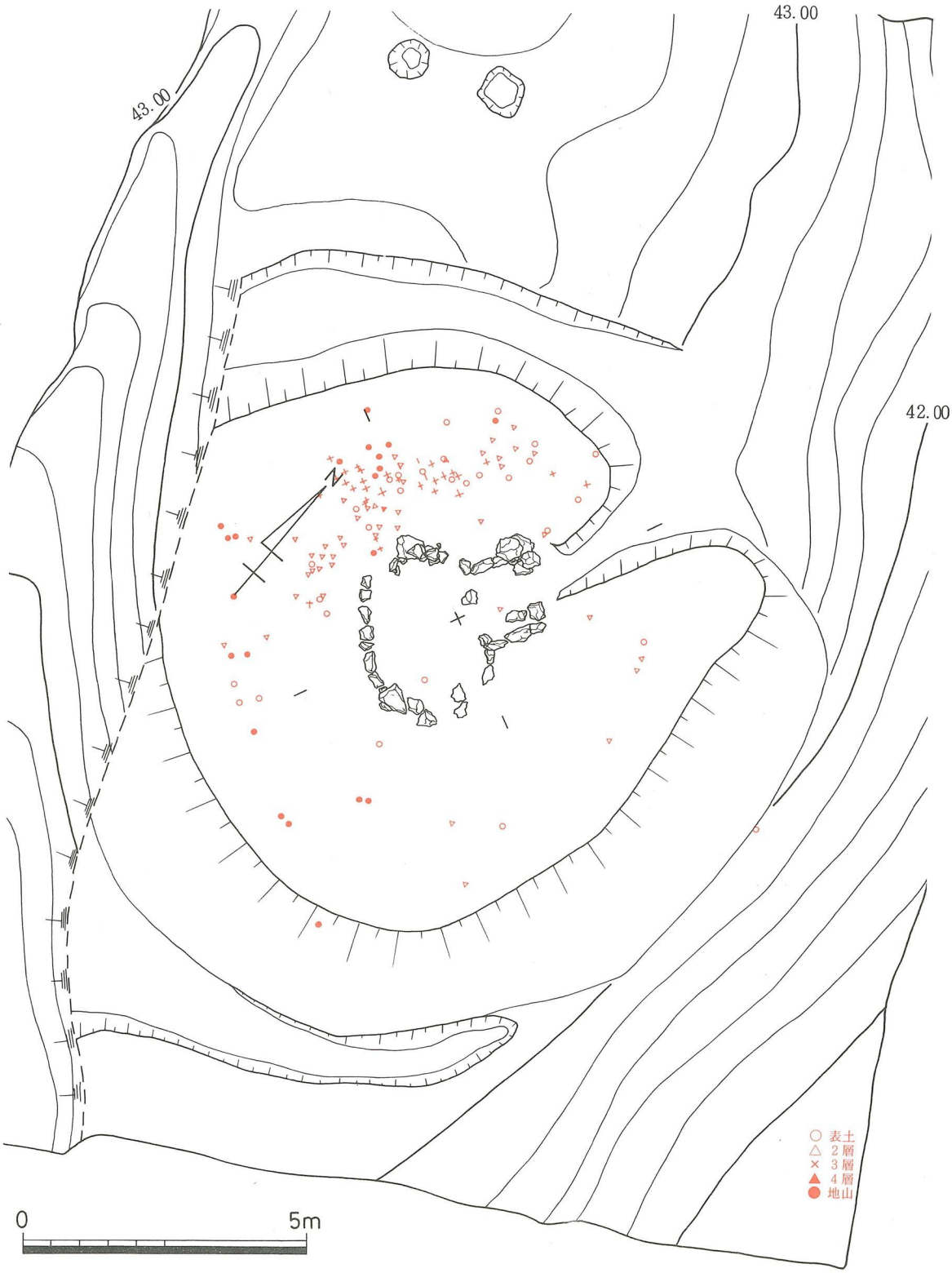
脚部は，下方に向かって徐々に広がっていき，接合部から8.7cm下方に幅４㎜，深さ１㎜の凹線を２条設ける。酸化炎による焼成にとどまり，全体に明褐色を呈し風化著しい。

②　脚部の破片である。下半部の一部を欠失するが脚端部を図上で合わせて表現しておいた。全体に上下を三分割した境目に上下２列の凹線が２段にわたって走る。その凹線によって仕切られた中央の区画には縦長の長方形透かしが切り込まれている。裾部は「ハ」の字状に開く。

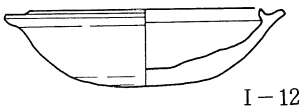
第7図　池ノ奥1号墳甕片（Ⅰ－63）の散布状況

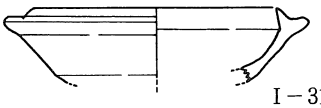


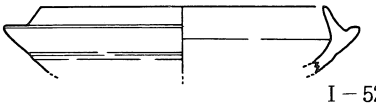
第8図　池ノ奥1号墳出土遺物実測図(1)　⅓

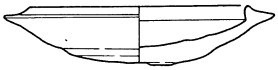


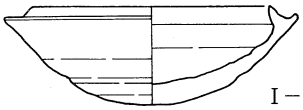
第７図　池ノ奥１号墳甕片（Ⅰ－63）の散布状況

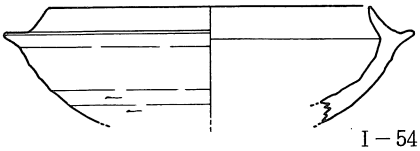

I－12

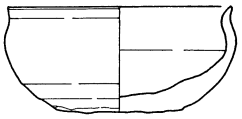

I－31

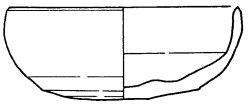

I－52

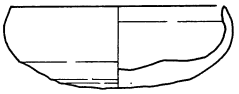

I－57

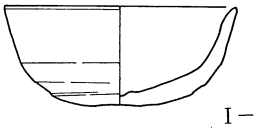

I－19

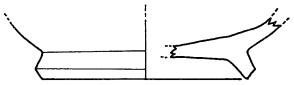

I－54

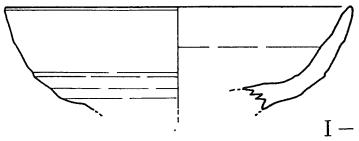

I－10

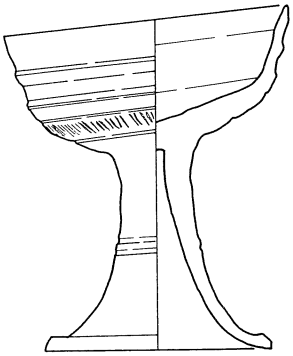

I－1

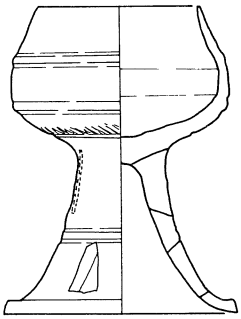

I－20

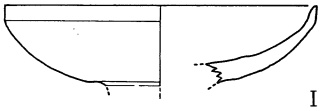

I－6

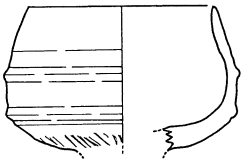

I－18

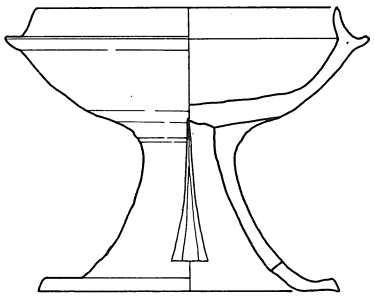

I－7

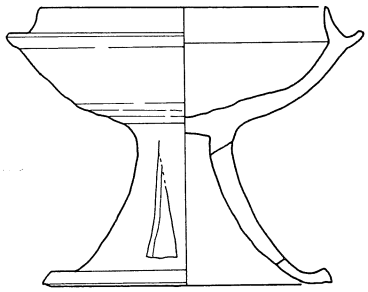

I－35

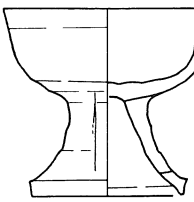

I－36


I－21

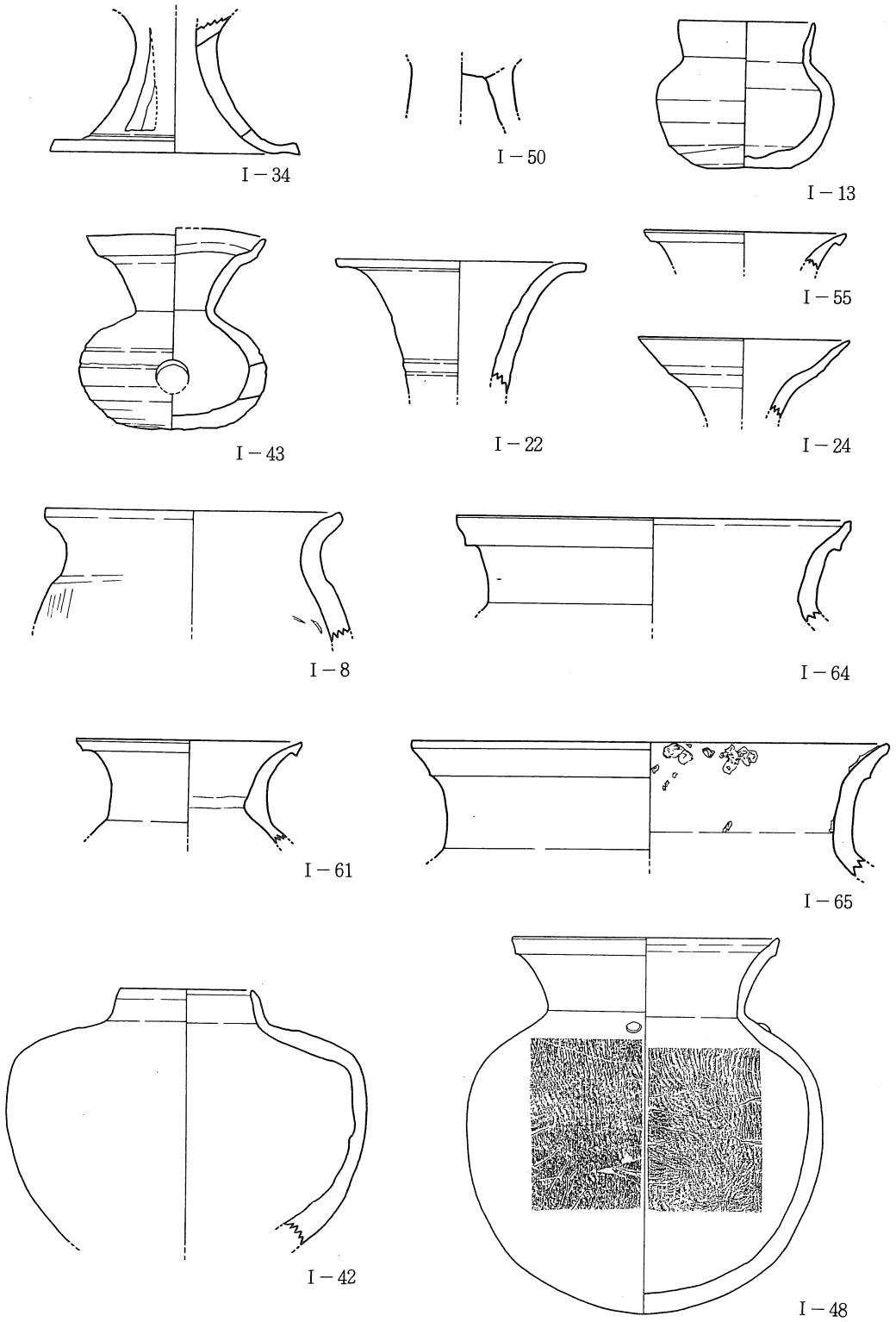

I－44


I－32

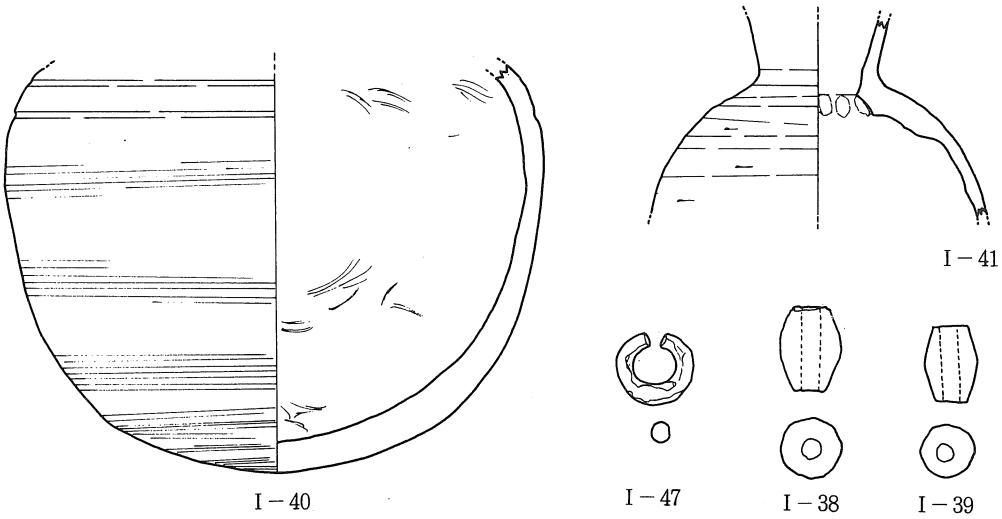

I－33


I－37

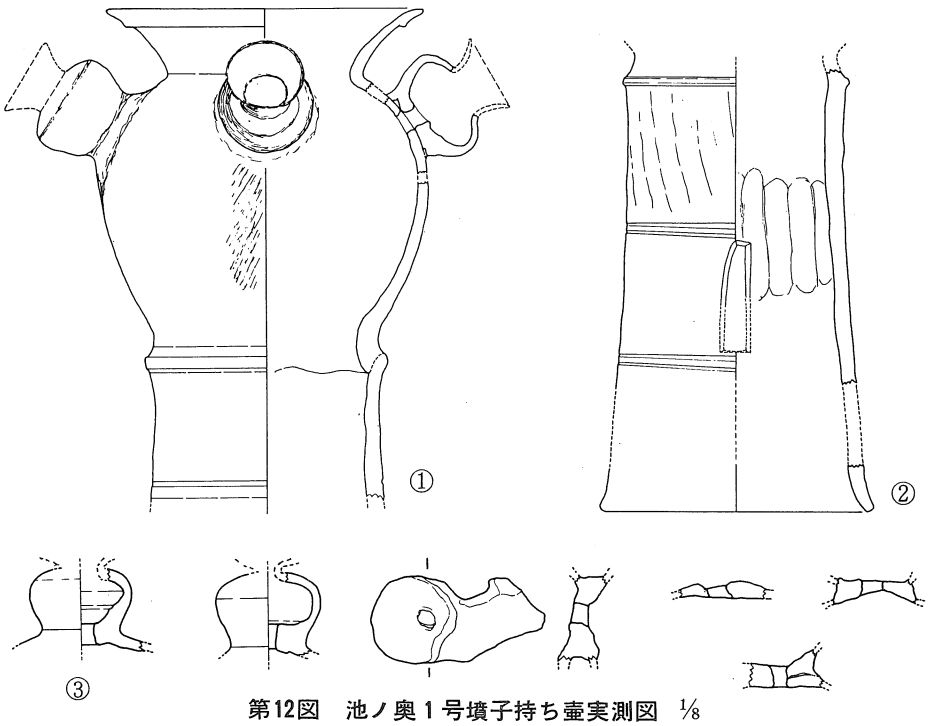
第９図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(2)　⅓



第10図　池ノ奥1号墳出土遺物実測図(3) ⅓



第11図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(4) 1/3

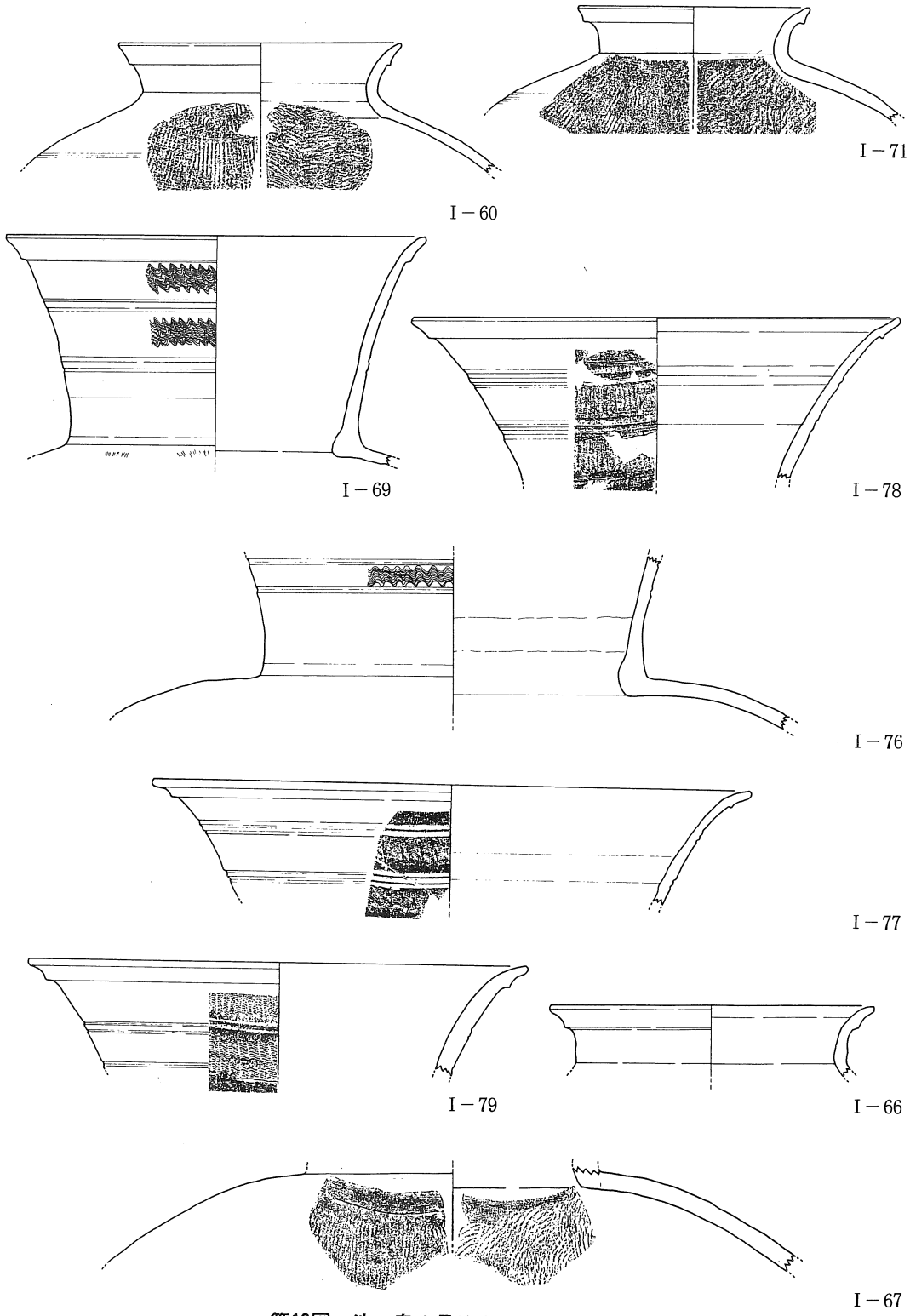


第12図　池ノ奥１号墳子持ち壷実測図　1/8

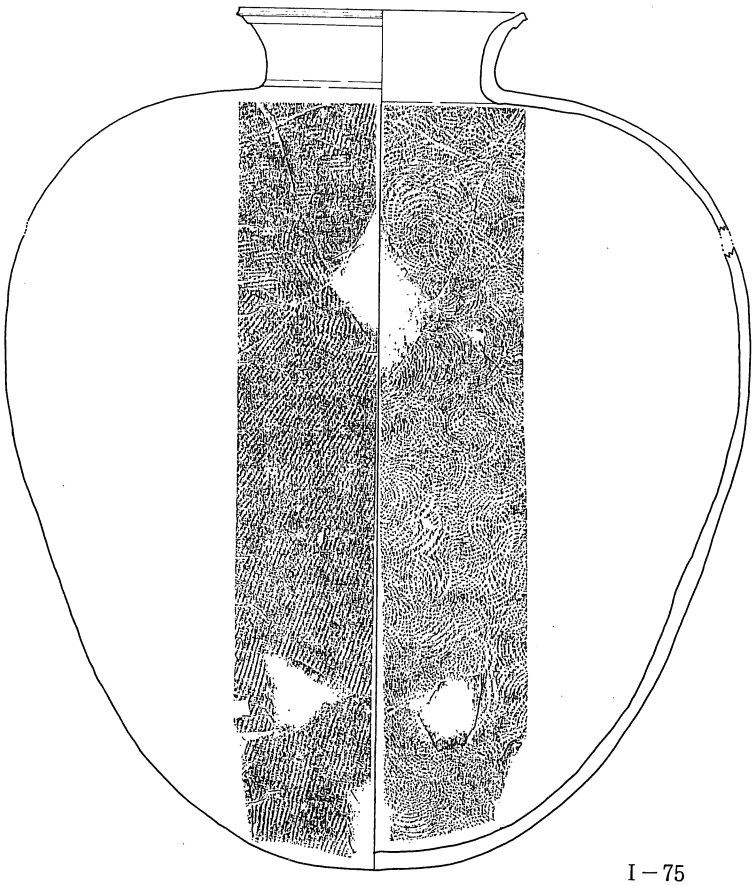
外面は縦方向の板状工具によるカキ目調整を施す。内面は一部タテ方向に２～2.5cmの幅の削り調整を施すが，接合部付近と下半部は水平又はやや斜方向のナデ調整を施す。

③　子壺の破片。

子壺の破片は図に示したものの他，２個体あり，親壺１個に対して４個の割合からすれ



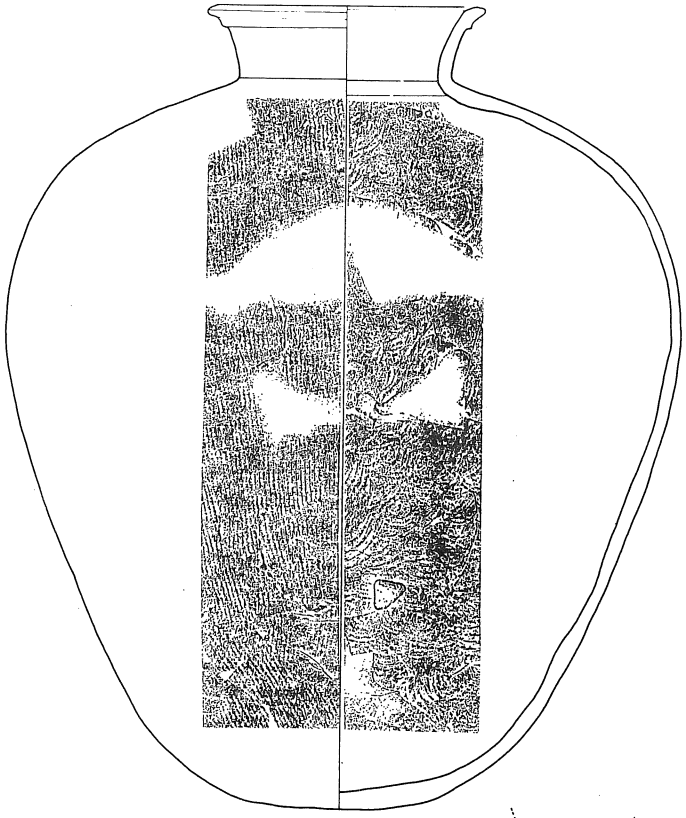
第13図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(5) 1/5



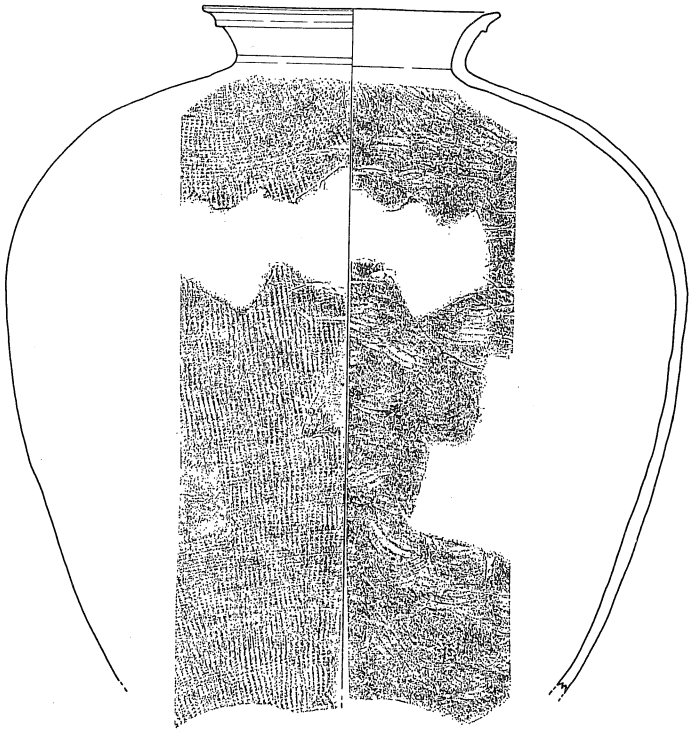
I－75

I－68

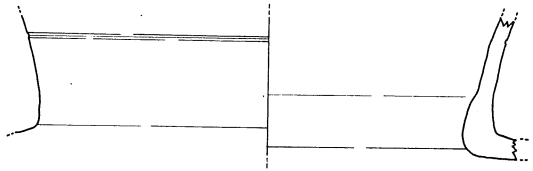
第14図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(6)　1/5



I－73

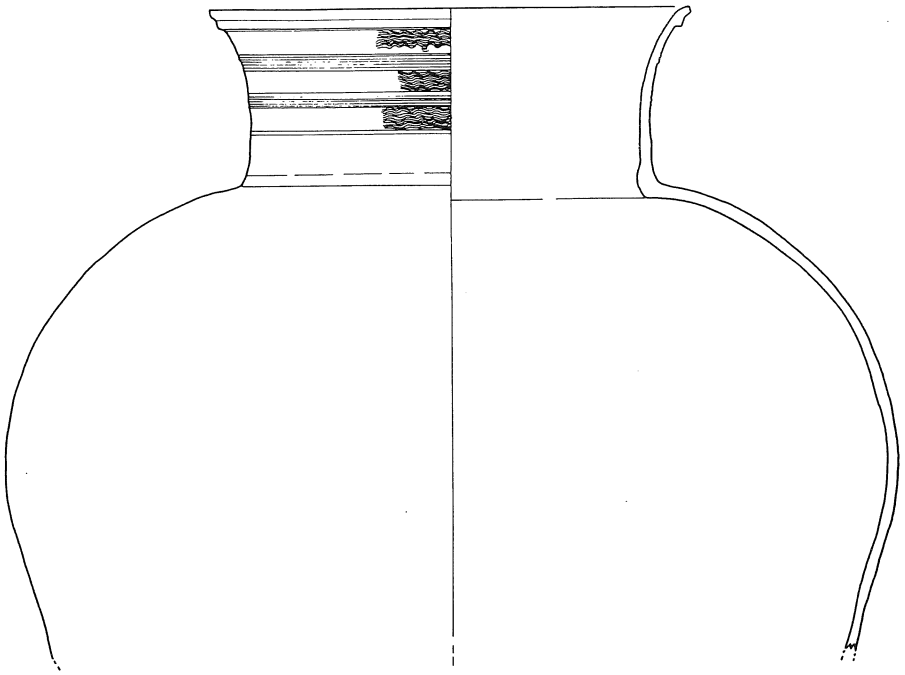


I－72

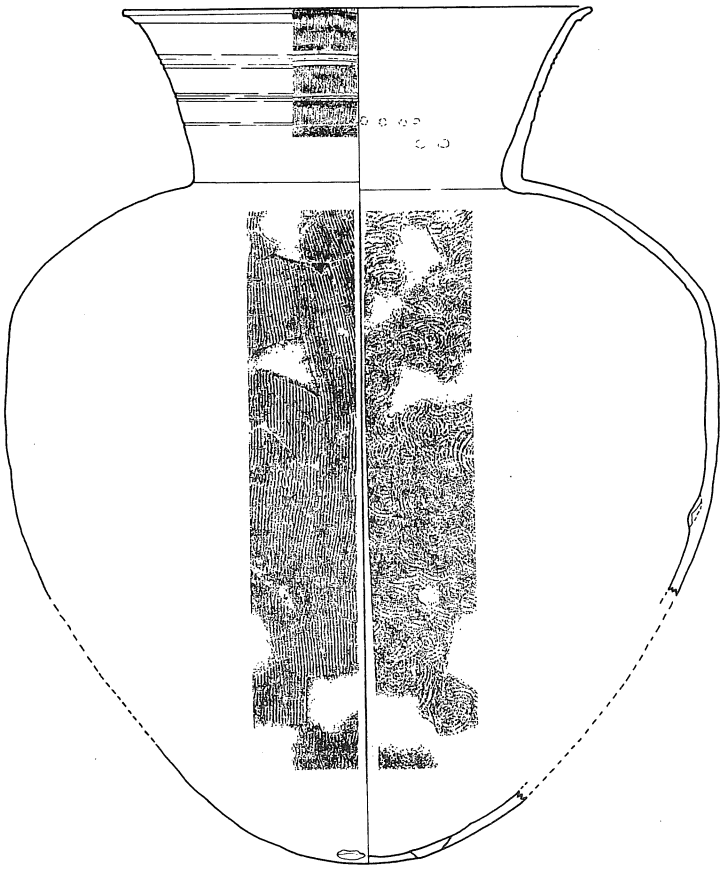


I－80

第15図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(7)　1/5

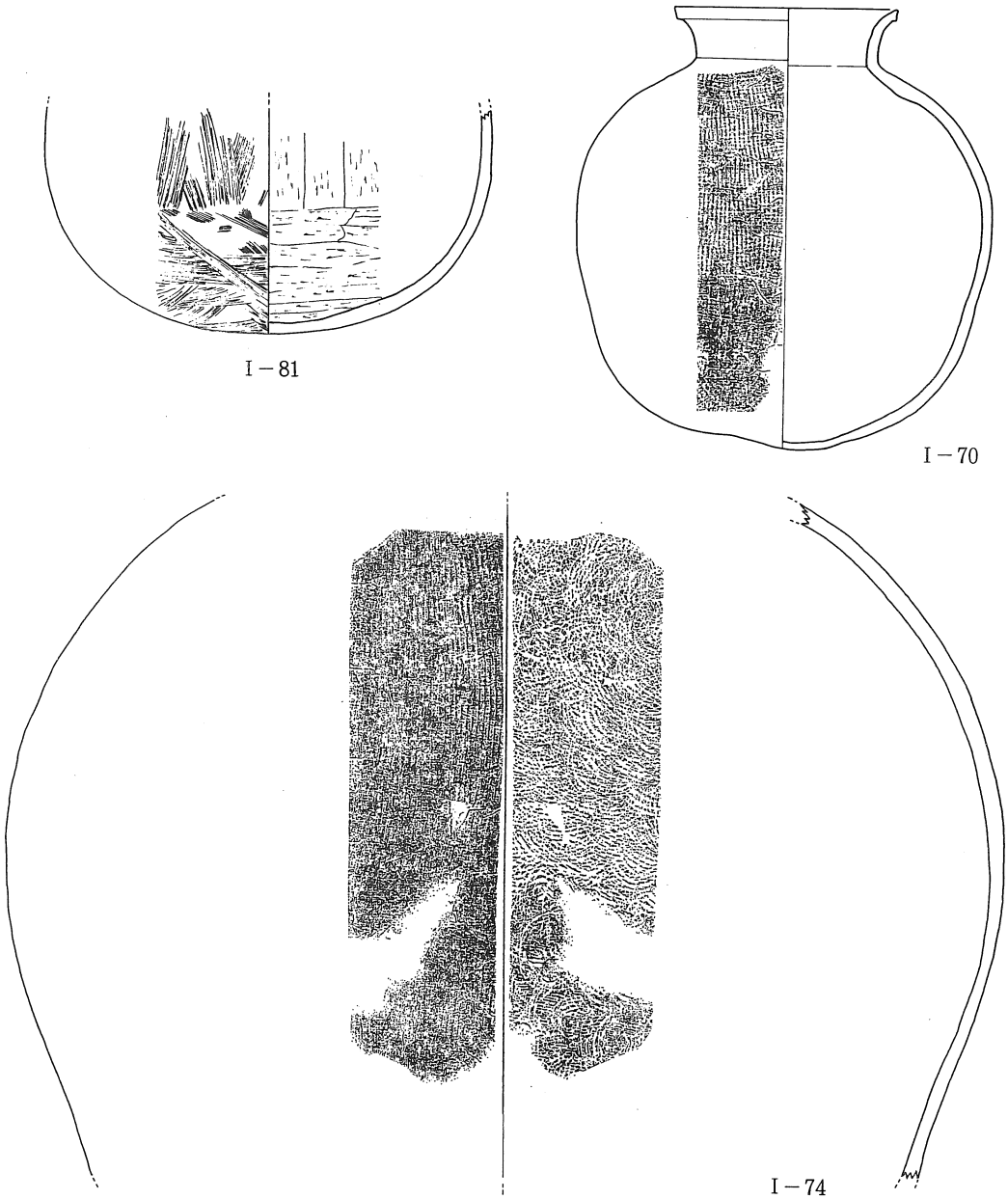


I－62



I－59

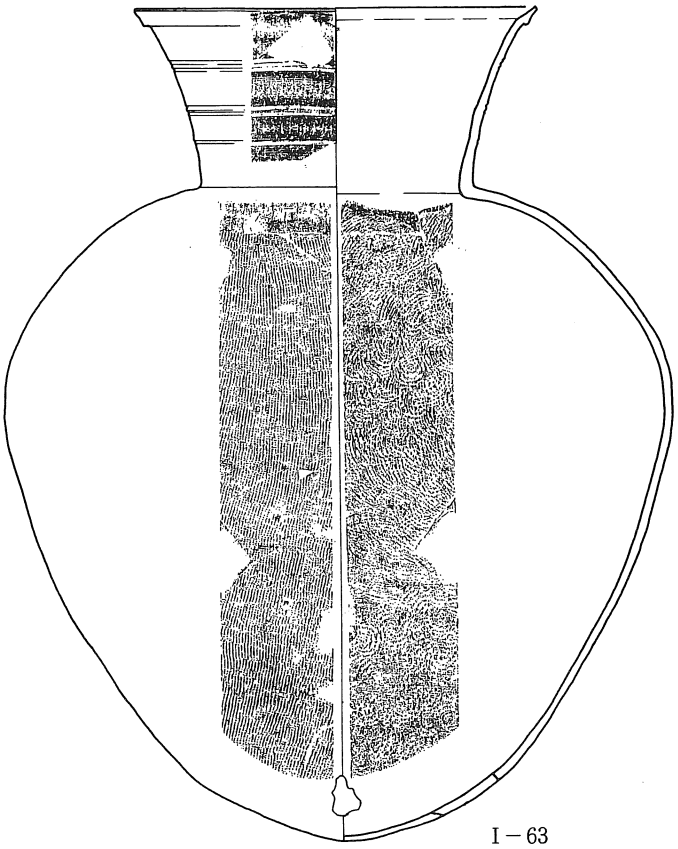
第16図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(8)　1/8



第17図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(9) 1/5

ば，親壺は３個体はあったことになる。

子持ち壺の最近の研究によれば，親壺の底部を省略した形態のものは出雲地方を中心に出土する特異なものであることから，「出雲型子持ち壺」と呼称され[註1]，本例はその中のＣ類とＤ類の中間形態をなすものと言えよう。



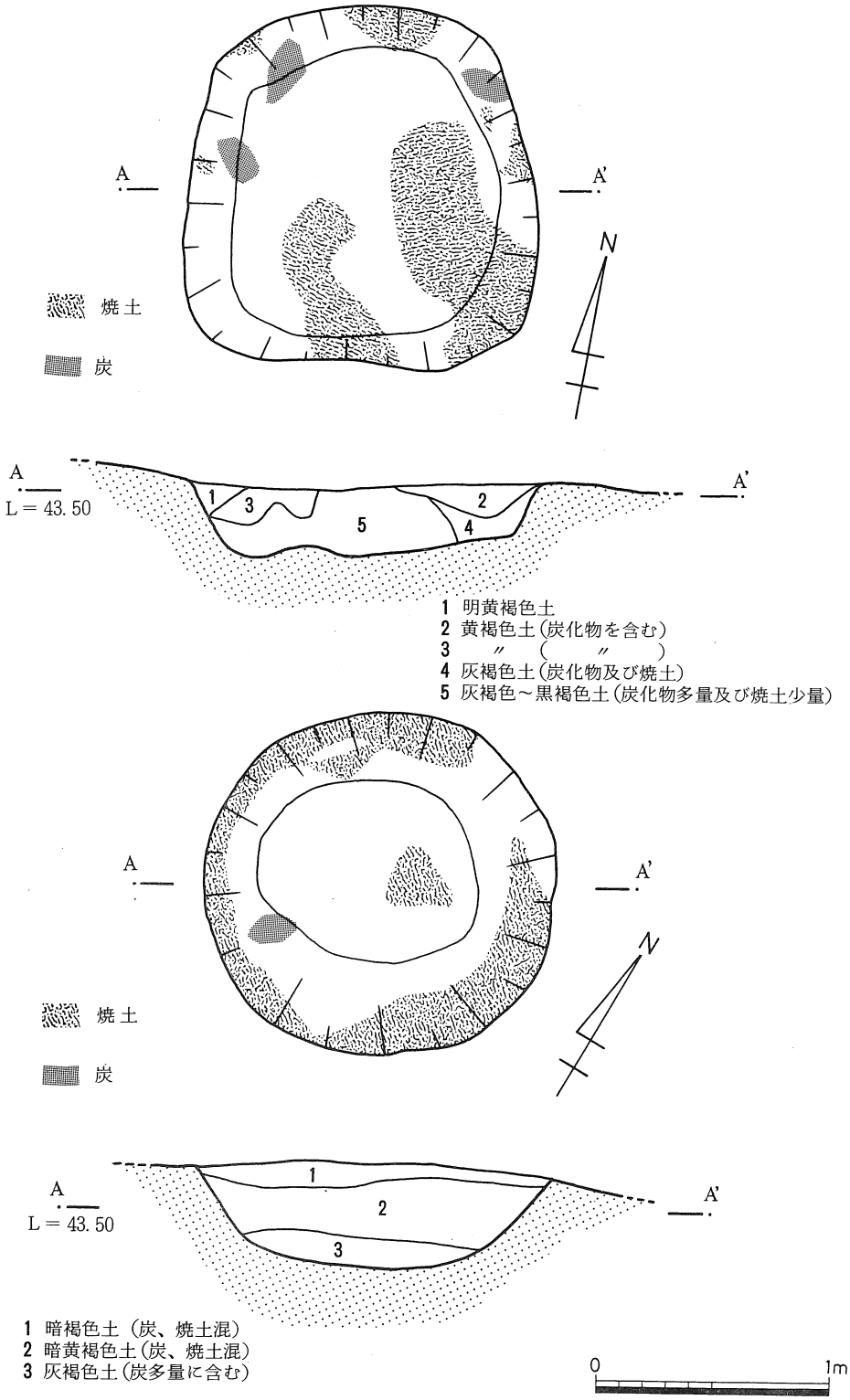
第18図　池ノ奥１号墳出土遺物実測図(10)　1/8

その理由は，親壺と脚部の接合部が突帯となり表現されている反面，脚部は文様がなく凹線文で区画するのみである。

ところで，子持ち壺を出土する古墳をみてみるとＣ類では薄井原古墳や手間古墳，山代方墳など県内でみても，又地域別でみても，規模内容共に一級の古墳が，圧倒的に多いのである。本古墳も，低丘陵の尾根上に立地し，蓋坏類の須恵器編年から考えて，イガラビ・池ノ奥古墳群中最も早い段階（六世紀後半頃）に築造されたもので，経済的，政治的にも強力な実権を掌握していた大井地区の豪族の墓であると考えられる。

その他の遺物　渡銀環（Ｉ－47）は3.1cm×2.75cmのもので損傷がかなり激しい。中央を穿孔した土錘（Ｉ－38・39）も出土している。

その他の遺構　周溝の西外方平坦面には隅丸方形（SK01）及び円形（SK02）の土壙があっ



第19図　池ノ奥1号墳ＳＫ－０１，ＳＫ－０２実測図

第１表　池ノ奥１号墳出土遺物一覧

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
I−01	前庭地山面Ｐ－１	坏身	9.0	3.6	
I−02	前庭 Pit 1	坏身	8.7	3.3	立上がり0.1，角度58.0，上外方
I−03	盛土第２層上面472	坏蓋	10.1	2.8	受部付。つまみ無し。
I−04	１区前庭682・630・683・707	坏蓋	10.0	3.8	単純小形？
I−05	前庭部707	坏蓋	13.0	4.7	上下に沈線。口縁内面に沈線
I−06	１区前庭670	坏身	9.0	3.9	
I−07	１区前庭686	高坏	13.6		坏部片
I−08	93	壺	13.2		口縁から頸部片
I−09	前庭701	坏蓋	8.3	1.7	受部付蓋。小型
I−10	19・217・303	坏身	8.7	4.1	口縁端にくびれ
I−11	１区盗掘壙内攪乱土188	坏蓋	14.2		受部がない
I−12	176・254・468・90	坏身	9.0	3.0	立上がり0.1，角度53.0，上外方
I−13	971・965	小坩	6.0	6.6	
I−14	531	坏蓋	7.0	4.6	沈線一条。特殊容器の蓋？。
I−15	708	坏蓋	9.7	3.5	天井部やや平。坏身かもしれない
I−16	689	坏蓋	10.0	3.5	天井部やや平坦
I−17	193・433	坏蓋	9.2	3.5	箆記号
I−18	581	高台付坏			高台部のみ
I−19	836・943・844・846	坏身	9.2	3.9	立上がり0.4，角度47.0，上外方
I−20	700・730・701	坏身	8.4	3.2	口縁部は内傾する。
I−21	860	高坏	12.2		坏部片
I−22	241・303・478	長頸壺	11.4	6.0	口縁部片
I−23	863・845・47	坏蓋	11.1	4.65	環状つまみのついた蓋。高坏の蓋か
I−24	549	瓿	9.6		広がりからみておそらく瓿の口縁
I−25	832	坏身	10.4		立上がり0.8，角度39.0，上外方
I−26	989	坏蓋	12.7	4.2	上下に沈線。
I−27	980826	坏蓋	14.2	4.5	上下に沈線。端部は丸い。
I−28	969	坏蓋	12.0		上下に僅かな沈線。内面に僅かな段
I−29	532	坏蓋	10.2	4.1	単純・小型？
I−30	691・698	坏身	8.8	3.7	立上がり0.3，角度53.0，水平
I−31	630・371・381	坏身	9.8		立上がり0.3，角度54.0，水平
I−32	542・702・537・543・544・546	有蓋高坏	11.6	11.1	一段三方透かし。受部あり。
I−33	702・703・704	有蓋高坏	11.3	10.8	一段三方透かし。受部あり。
I−34	685	高坏			脚部片。一段三方透かし。
I−35	531	高坏	11.2	12.9	突帯二本と胎土を寄せて爪型に文様を施す
I−36	989	高坏	6.6	12.0	二方二段透かし。
I−37	1016・944	高坏	7.85	7.35	小型。四方一段透かし。
I−38	104	土錘	3.3	2.4	
I−39	98	土錘	3.0	2.1	
I−40	551・552・1032・537・12・85他	壺			大型？
I−41	1160	長頸壺			頸部から体部にかけての破片

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
I−42	1号南斜面排土388・1162	短頸壺	6.0		体部はこのタイプでは大型に属する。
I−43	489・728・507	瑯	7.5	8.85	
I−44	380・336・372・512	高坏	7.2		
I−45	338・540・653	坏蓋	10.8		
I−46	1161	坏蓋(輪状つまみ)			口縁端不明。
I−47	669	鍍銀環	3.1	2.75	緑青が出ている。
I−48	917・922・927・316・1161他	壺	11.8	17.1	肩部に円形の浮文を1個貼付け。
I−49	石室攪乱土1149	坏蓋	9.8	2.9	口縁端やや内面に傾斜。小型化したもの？
I−50	87	高坏			脚基部片
I−51	541	坏蓋			上下に沈線。端部不明
I−52	760・777	坏身	11.0		立上がり0.8，角度43.0，上外方
I−53	1161・823・546	坏蓋	14.0		上下に沈線。口縁内面に沈線
I−54	685	坏身	12.5		I−1｜立上がり1.1，角度47.5，上外方
I−55	新1区第2層951	壺			口縁部
I−56	旧3区785	坏蓋			地山＋5cm
I−57	南斜面表採	坏身	8.4	2.2	立上がり0.3，角度55，水平
I−59	墳裾	甕	49.4	90.0	体部最大径74.8，底部に穿孔あり。
I−60	1161新1区，1162新2区	甕	21.5		
I−61	新2区第2層	甕	10.2		口縁部のみ。
I−62	墳裾	甕	49.8		胴部最大径92.4
I−63	墳裾	甕	42.0		
I−64	新2区墳丘裾近く第2層	甕	17.8		口縁部。956
I−65	池1号墳南斜面	甕	21.6		口縁部。65
I−66	3区墳裾　E0.65・S6.45	甕	24.6		口縁部。570
I−67	3区山道第2層地山	甕			556・436・989・990
I−68	墳裾	甕			
I−69	墳裾	甕(赤焼き)	32.0		口縁部〜肩部。530・338
I−70	墳裾	壺	15.2	30.0	
I−71	墳裾	甕	17.6		
I−72	406・1100・408・405・410他	甕	19.6	43.9	
I−73	墳裾	甕	18.2	52.2	
I−74	墳裾	甕			胴部最大径33.7
I−75	墳裾	甕	28.2	85.5	
I−76	墳裾	甕	29.8		頸部〜肩部
I−77	1085・963	甕	45.8		
I−78	墳裾	甕	37.2		
I−79	墳裾	甕	38.0		
I−80	墳裾	甕			頸部径30.2
I−81	新4区墳裾第2層地盤	壺			土師器1066，底部。
I−82	墳裾	子持ち壺			
I−83	墳裾	子持ち壺			
I−84	墳裾	子持ち壺			

た。いずれも壁面の上部と底が焼け締まっており，中には炭土が堆積していた。内部に遺物は皆無であった。

SK01は，上端径0.75－0.75m，下端径0.62－0.56m，深さ0.15m，SK02は上端径0.75m，下端径0.4m，深さ0.23mを計る。

追葬について　本古墳の出土遺物は明かに二つの形態に分類された。蓋坏類で見てみると，一つはⅠ－54・Ⅰ－11の形態で，口径も大きく立ち上がりも高いものである。もう一方の形態はⅠ－4・Ⅰ－2・Ⅰ－1・Ⅰ－3で，口径が小さくなって立ち上がりも低いものである。こうしたことから，本古墳は少なくとも一回の追葬か，墓前祭が行われたのではないかと思われる。

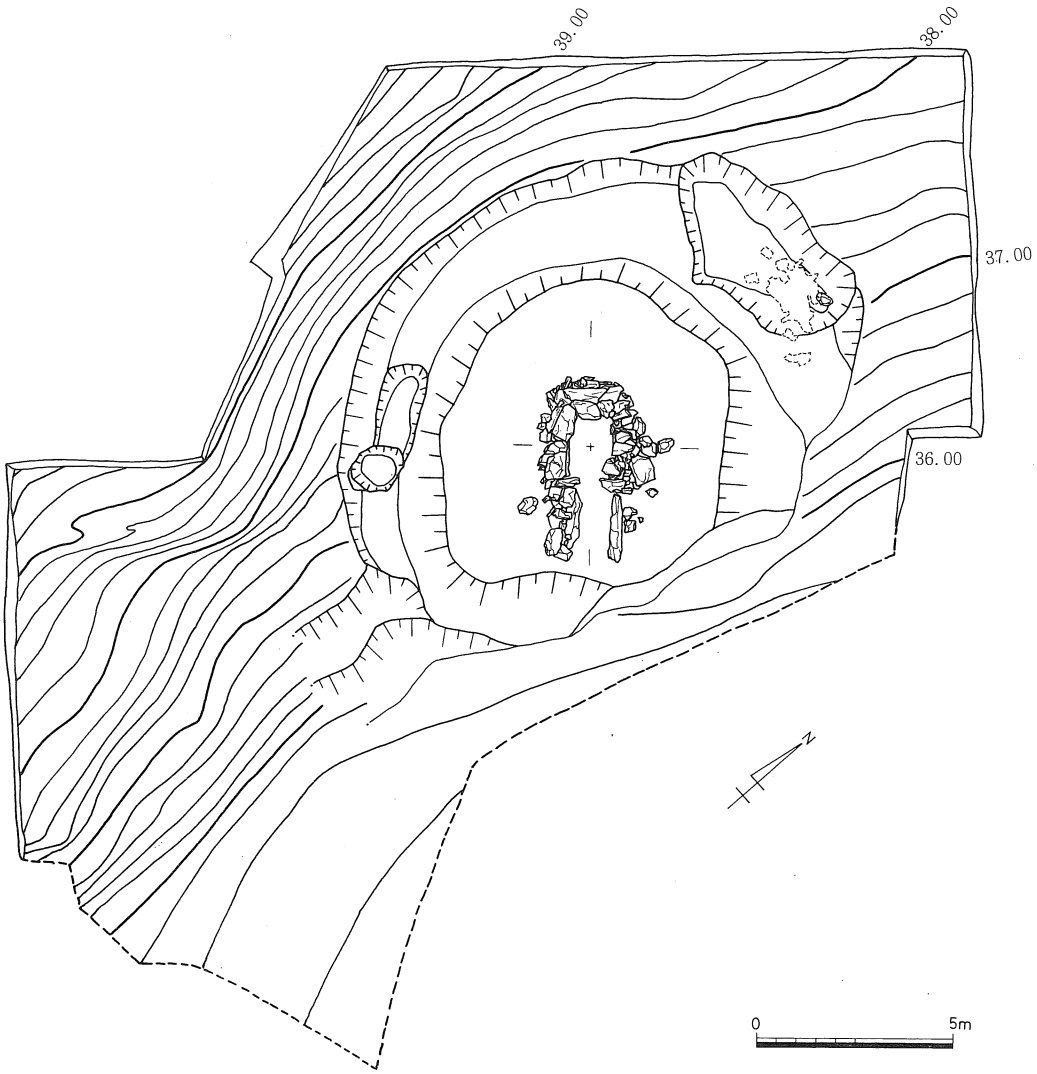
3. 池ノ奥2号墳

位置と現状　池ノ奥2号墳は，1号墳の南斜面下5mに位置する。標高は墳頂部で38mである。古墳の南側及び西側は，緩斜面を削り取ったように急な法面となって廻っており，本古墳築造の際加工されたものと思われる。この墳丘と思われる小丘陵の頂部に，南東に開口している石室の上面プランが認められたので，石室を有する古墳であると考えるに至った。

墳　丘　調査の結果，南北9.4m，東西9.0m，高さ0.5mを計る円墳と思われ，墳丘中央に南東に開口した横穴式石室を構築する。墳丘の東側を除く周囲に幅0.8～2.0m，深さ最大0.15mのU字状の溝を有する。

主体部　石室は奥壁1，側壁2，左右玄門石各1，羨道部側石2の計7個の大石が腰石となって構成される。玄室の規模は中軸長1.85m，幅1.28m，高さ現存1.08mのやや縦長形である。

奥壁の石材は幅1.48m，高さ1.08m，厚さ0.39m，左側壁は幅1.72m，高さ0.78m，厚さ0.15m，右側石は幅1.72m，高さ0.78m，厚さ0.33mで奥壁に左右の側石を立てかけた状態で置かれていた。それらの腰石の上端面の凹凸は，こぶし大から人頭大の石を使って水平に保つように詰めている。その上には，0.6～1.0m前後の正方形に近い石材で2～3



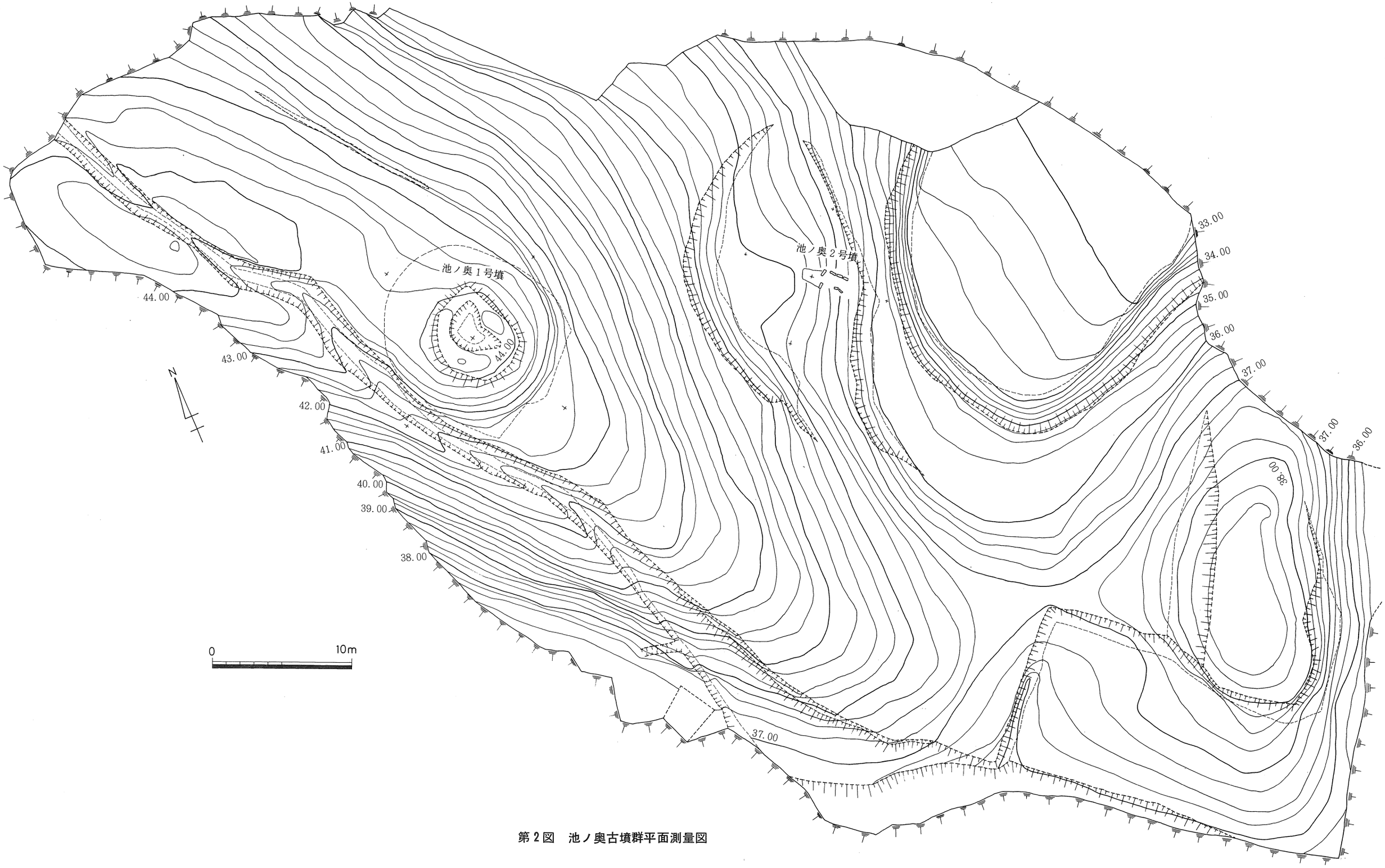
第20図　池ノ奥２号墳調査成果図

段の小口積みが遺存していた。

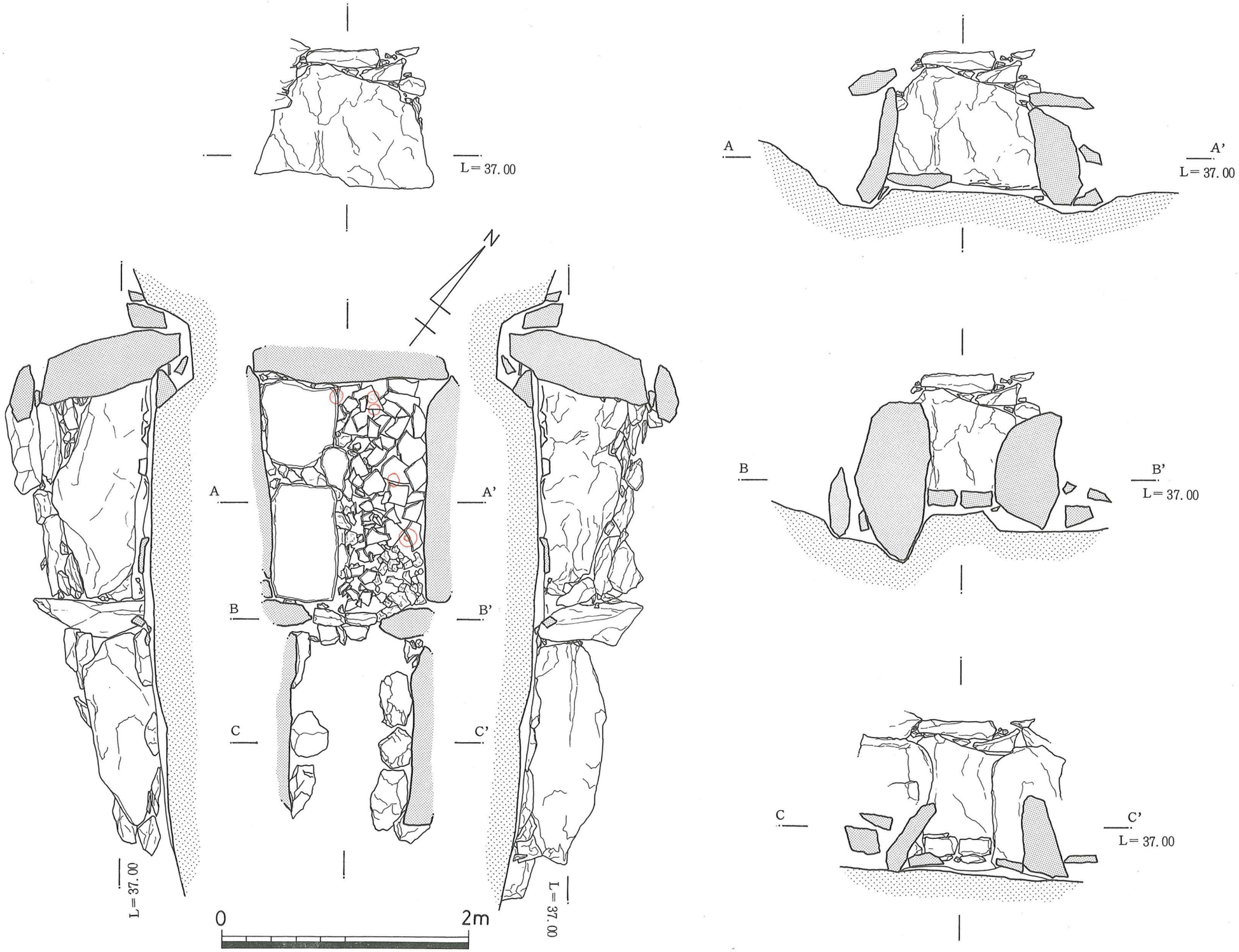
遺存する天井石は玄室及び羨道部とも１枚も残っていなかったが，東側の墳裾にそれと思われる長軸1.5m，短軸0.7m，厚さ0.3mの平坦な石が打ち捨てられていた。玄室を覆う為だけでもこれと同様の石材が２～３枚は必要であったと思われるが，他には発見出来なかった。

玄室床面左側は，２枚の長方形の酸性擬灰岩の石材を並べて屍床とする。右側は須恵器大甕を破砕して敷き積めて屍床としている。

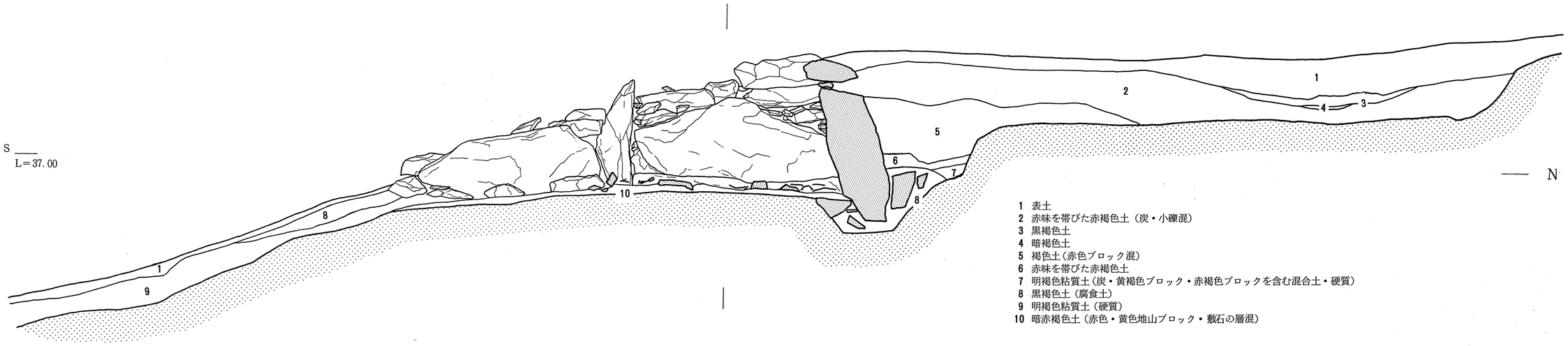
石室の掘り方は，当初の墳丘基盤が水平ではない為に，山側に向かって深く掘り込まれている。遺存する羨道部の側石南端基部を起点とすると，玄室奥壁では地山面から約80cm

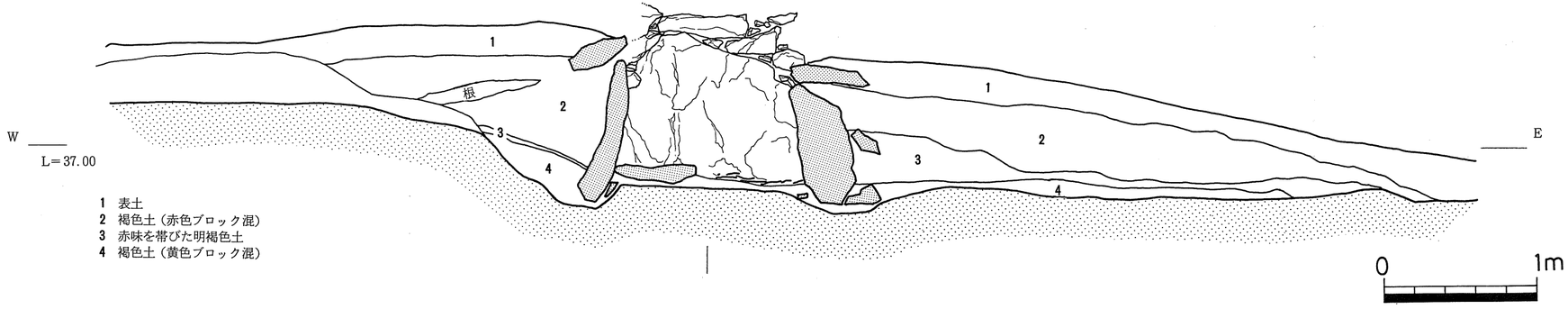


第2図　池ノ奥古墳群平面測量図

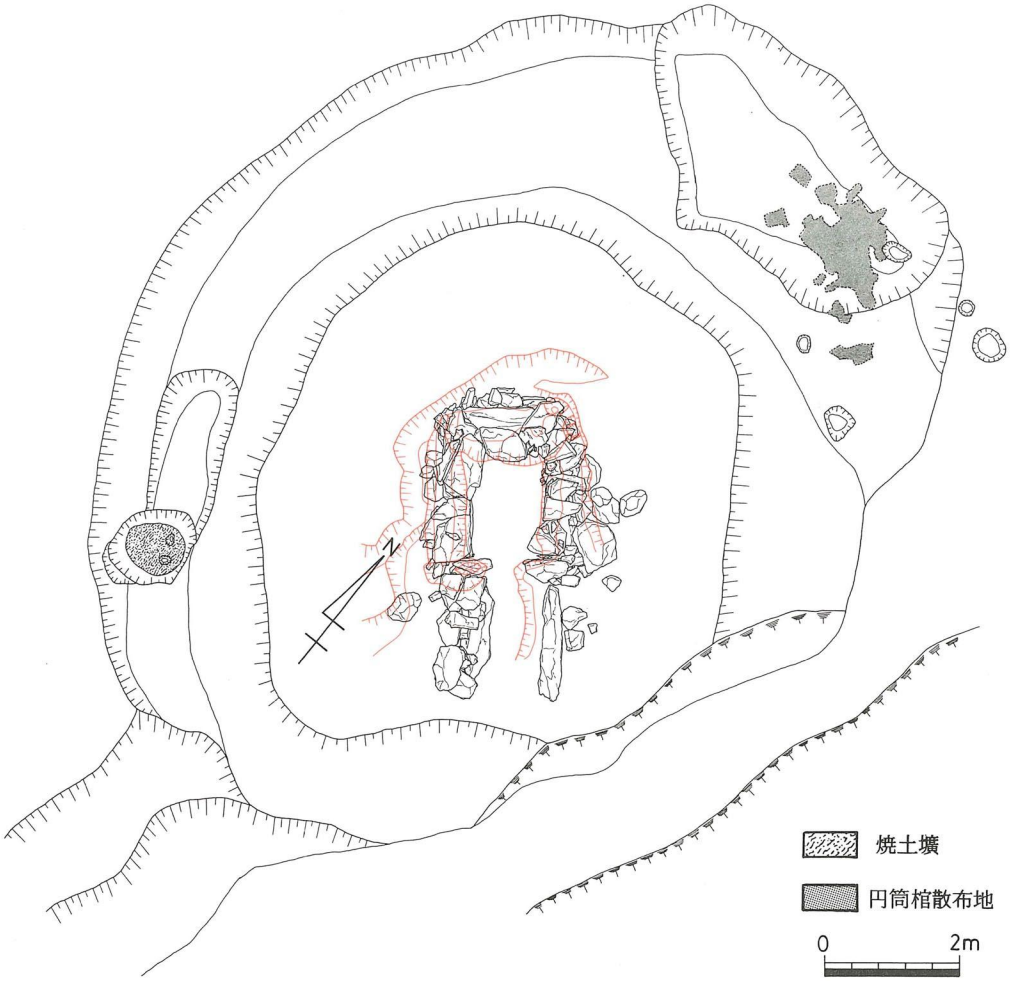


第21図　池ノ奥２号墳主体部実測図





第22図　池ノ奥２号墳墳丘断面図



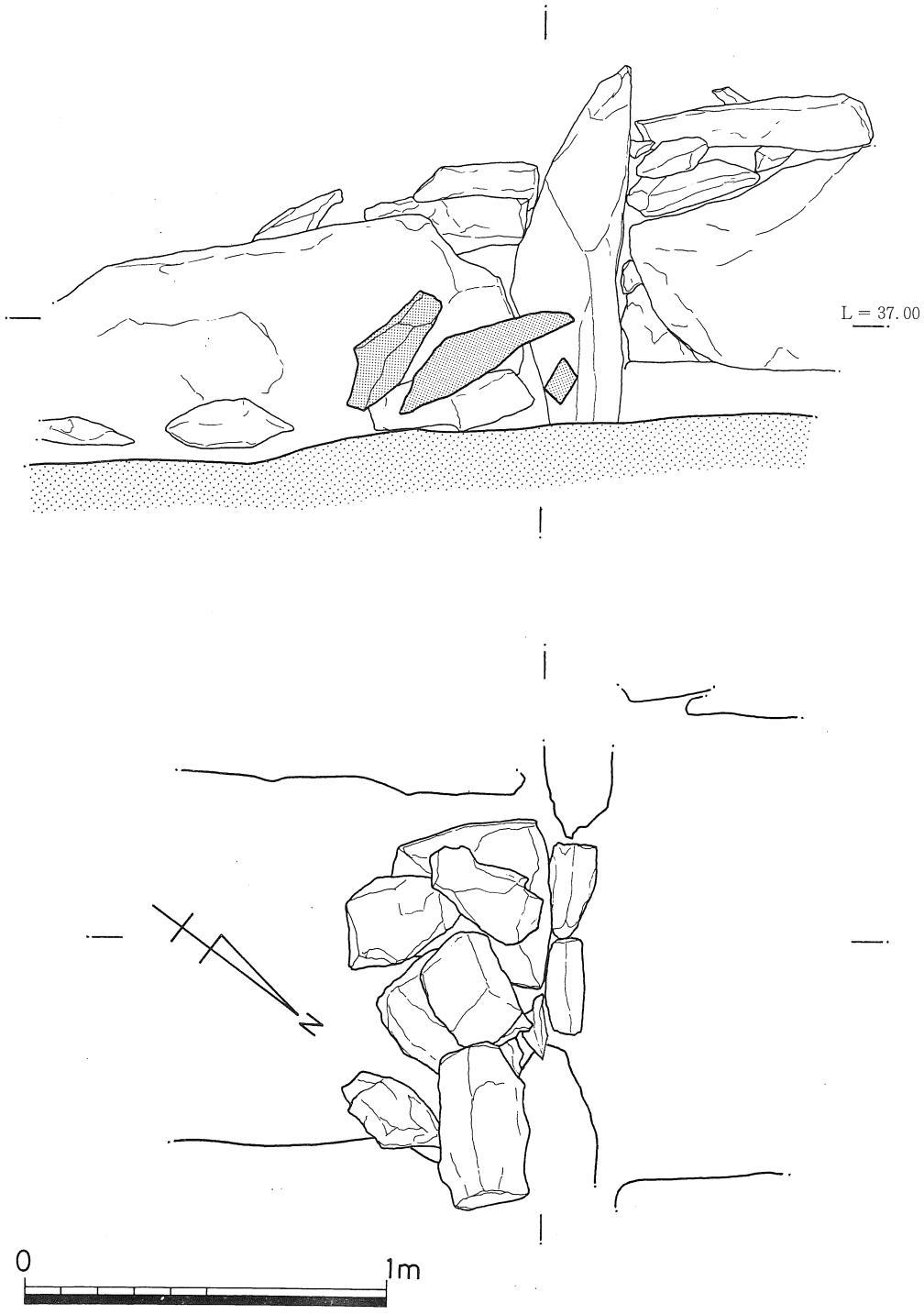
第23図　池ノ奥２号墳掘り方実測図

を計る。この後，左，右，奥壁の腰石の大きさに合わせて高さをほぼ均一に保つように地山を掘り込んでいるが，幅，深さともそれぞれの石材の大きさに伴って異なっている。

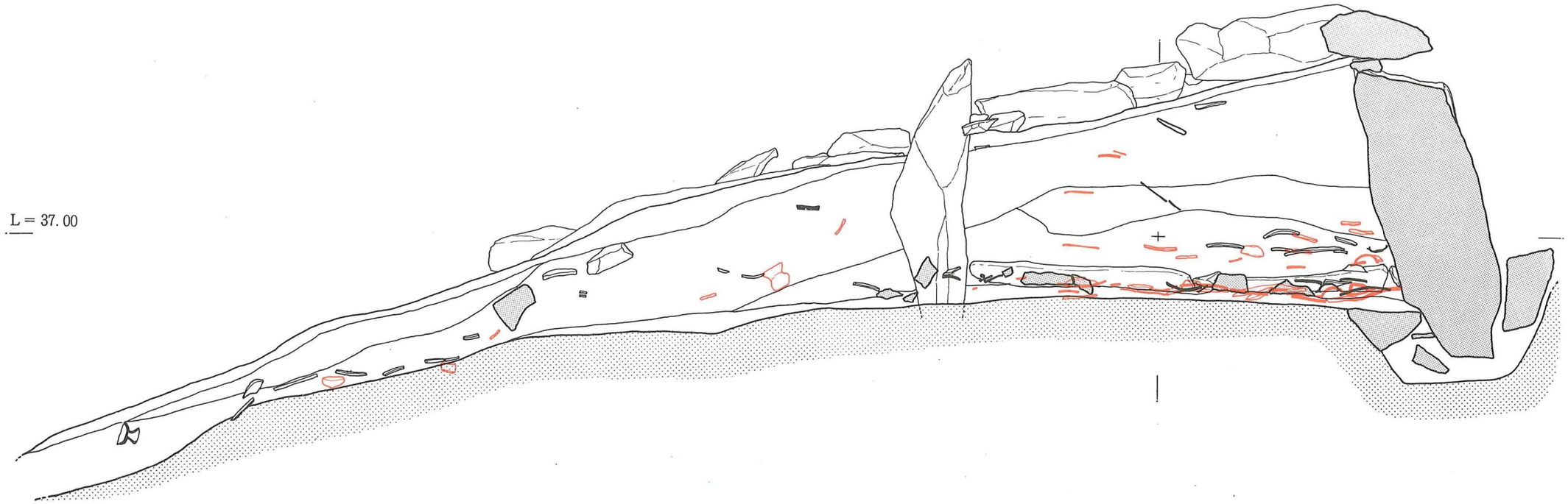
腰石の基部は，腰石の掘り方の隙間を埋めるように，内外面ともしっかりと石を詰めて固定している。特に奥壁外面は，人頭の石20～30個が投げ込まれたように積み上げられ，玄室の堀り方をも完全に埋めていた。

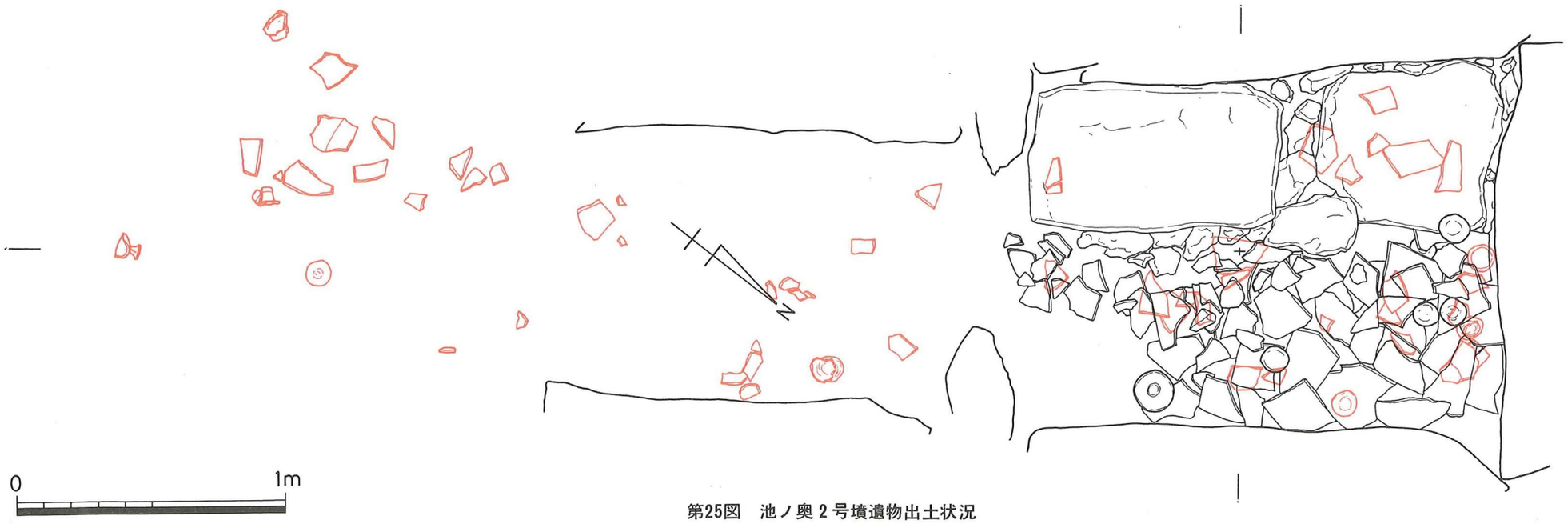
玄門部は，左側の石で，幅0.59m，高さ1.28m，厚さ0.3m，右側は幅0.53m，高さ0.94m，厚さ0.35mを計り，いずれも地山面に突き刺すように立てられている。羨道と玄門の境界には高さ0.12～0.13m，幅0.24～0.26m，厚さ0.1～0.14mの長方形の石２個を並べて梱石とする。

羨道部は，左右に各一枚の腰石状の大石が遺存していた。左側の側石は高さ0.56m，幅1.56



第24図　池ノ奥２号墳閉塞部実測図





第25図　池ノ奥２号墳遺物出土状況

m，厚さ0.13mの長方形で，上面に一段の積み石を遺存していた。右側石は高さ0.65m，幅1.78m，厚さ0.31mの長方形で上面の積み石は全く残っていなかった。

堀り方はなかったが，左右の側石の基部の内外面には30～40cm大の石が隙間なく詰められて固定されている。

遺　物　須恵器屍床の床面には輪状つまみの蓋，擬宝珠つまみの蓋等6個の完形の須恵器が検出された。J－08は輪状つまみのついた蓋で返りのついたもの。口径14.3cmを計る。J－17も坏蓋であるが，これには擬宝珠のつまみが施されている。J－18もおそらく坏蓋と思われるが，口径9.8cmの小型のもので単純なものである。J－16・J－19及びJ－20は坏身と考えられる。このうち，J－19は受部をもつもので，口径9.0cm，器高3.0cmを計り，立ち上がりと受部の高さはほとんど水平である。J－16と17は口径及び器形から見てセットになるものと思われる。

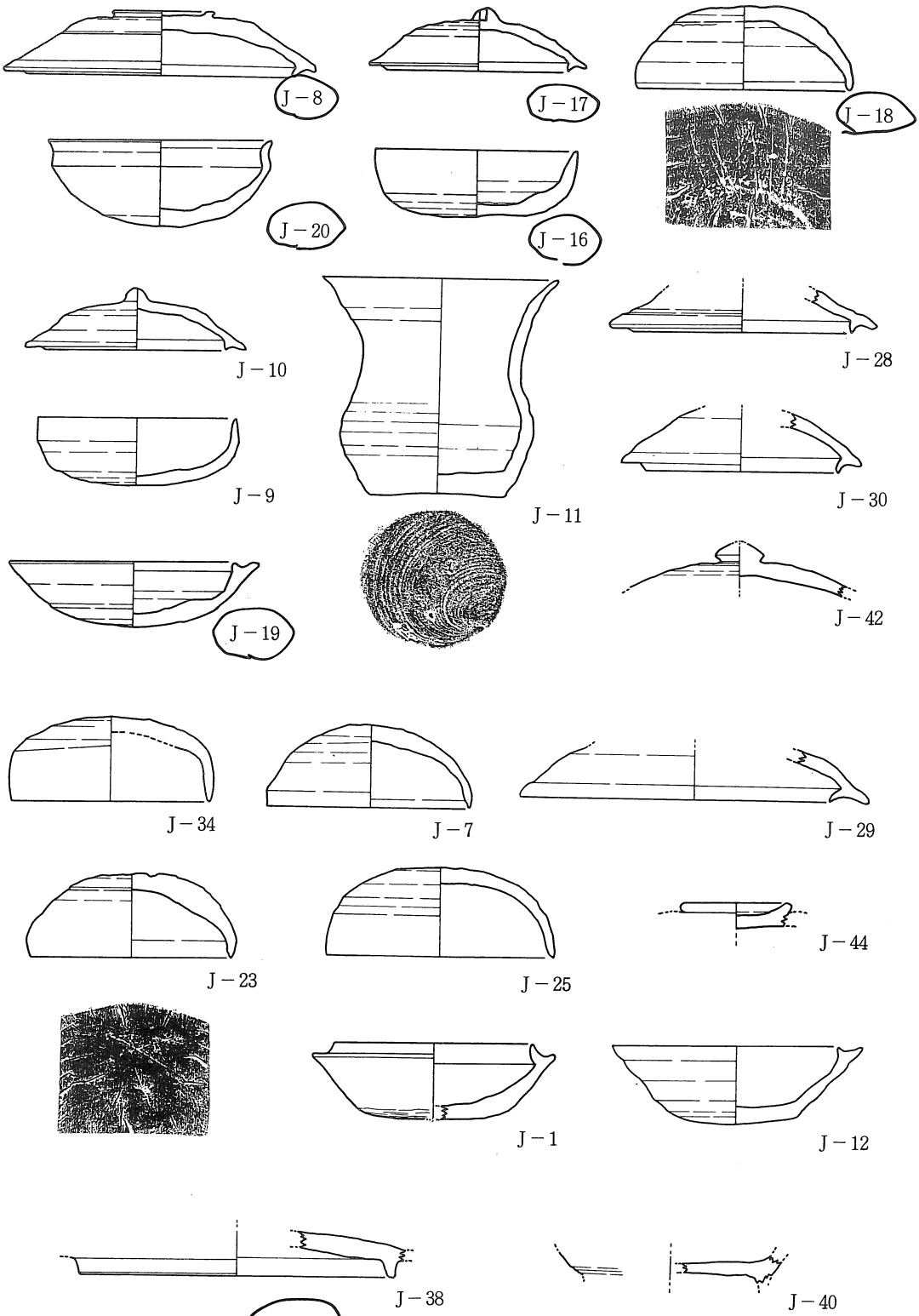
玄室床面より20cmほど浮いた状態でさらにいくつかの遺物が検出された。J－09とJ－10もそれぞれセット関係にあると考えられ，J－16・17とは口径・器高とも同じものである。J－11は羨道部から出土したもので，地山より15cmほど浮いた状態で検出された小型の壺である。口径10.8cmで，平底の底部外面には糸切り痕がある。

そのほか墳丘周辺からは高坏，壺，高台付坏，盤，瑯，土玉，土錘等多様な製品が出土した。特に北側の周溝溝底から出土した，特殊円筒棺は復元したところ，長さ1.22～1.23m，直径は両端がそれぞれ27.4cmと54.4cmを計る大型の須恵器質のものであった。外面には縦方向に7本，横方向に9～10本の突帯を設けるもので，島根県内では初例である。

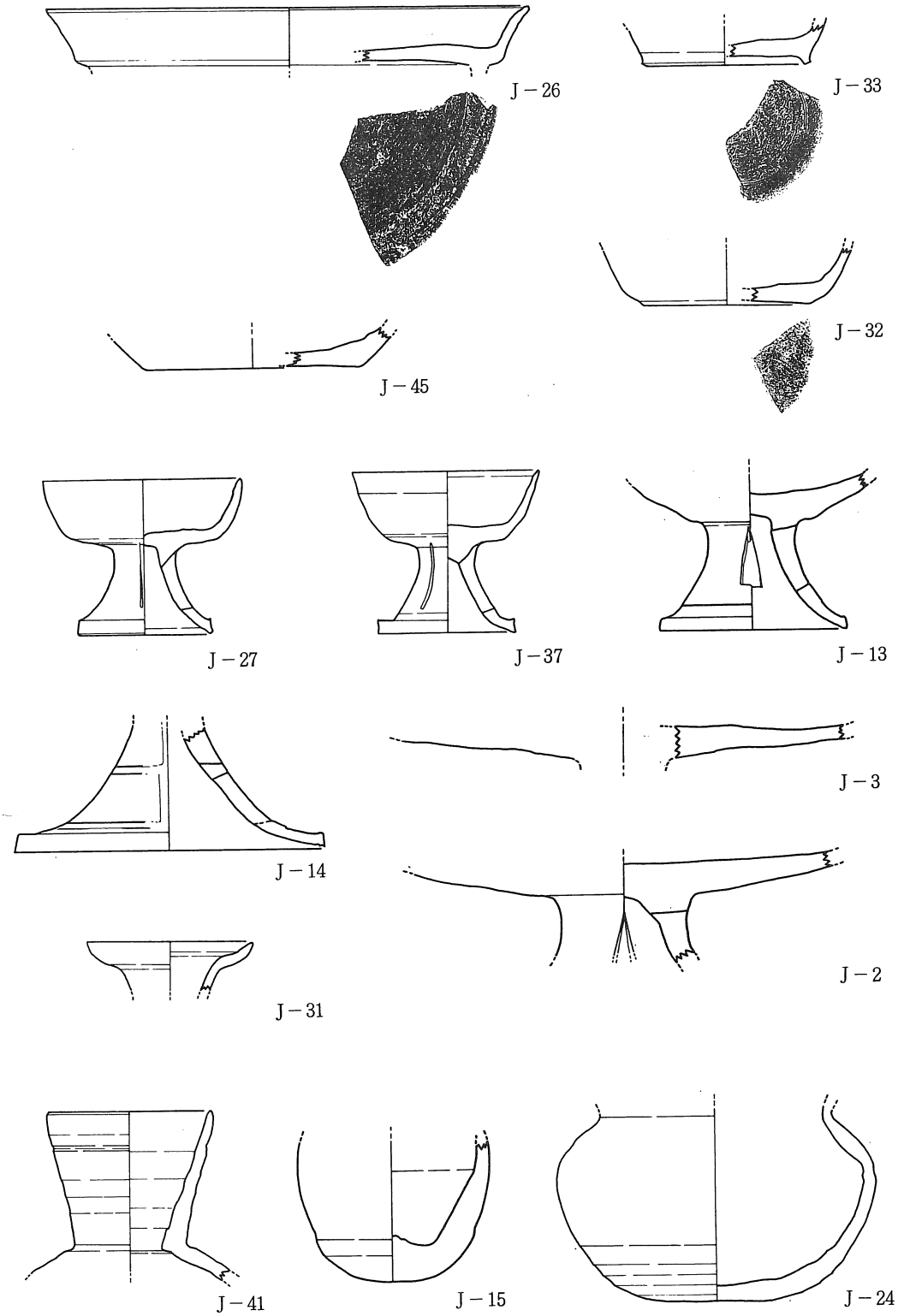
特殊円筒棺について　総長124cm，口径（成形時の上部）は28cm，底径（成形時の下部）は52.4cmを測る。全体に斜方向に傾いて焼成され，対称的ではない。

下部から順次粘土ひもを輪積みにしながら形づくり，3.8cm～6cmの幅の単位で，内面は円弧叩き，外面は平行叩きによって叩き締めながら更に上部を成形していき，それを約13回繰り返して成形している。

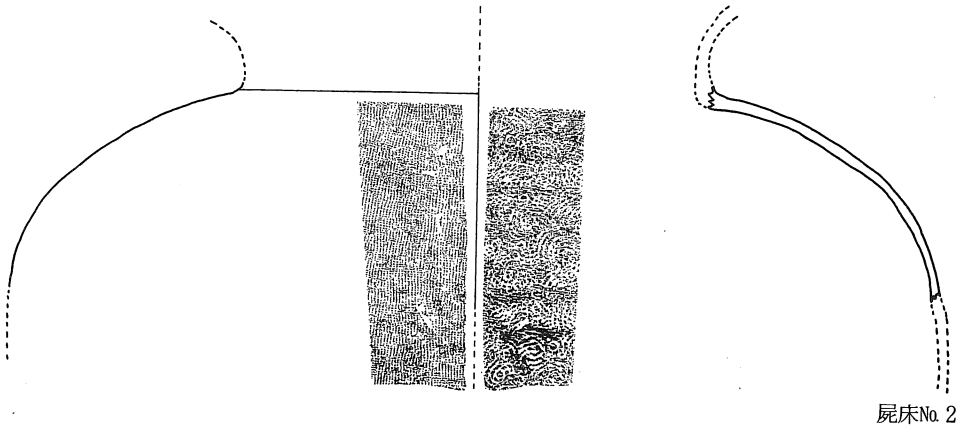
上部は高さ1.6cm，幅2cmのしっかりした突帯を設け，ナデて丁寧に仕上げ，2.8cm上部に丸味のある上端部を設けている。この突帯の下方には縦突帯6本，横突帯9本を貼付けている。横突帯については上部から順次付けていったものとみえ，底部付近で一部余白が出た部分に，3分の1ほどの円周部分で，もう一本貼付けている。これらの貼付け突帯は上部を平行叩きで叩き締め，断面が略台形となっている。



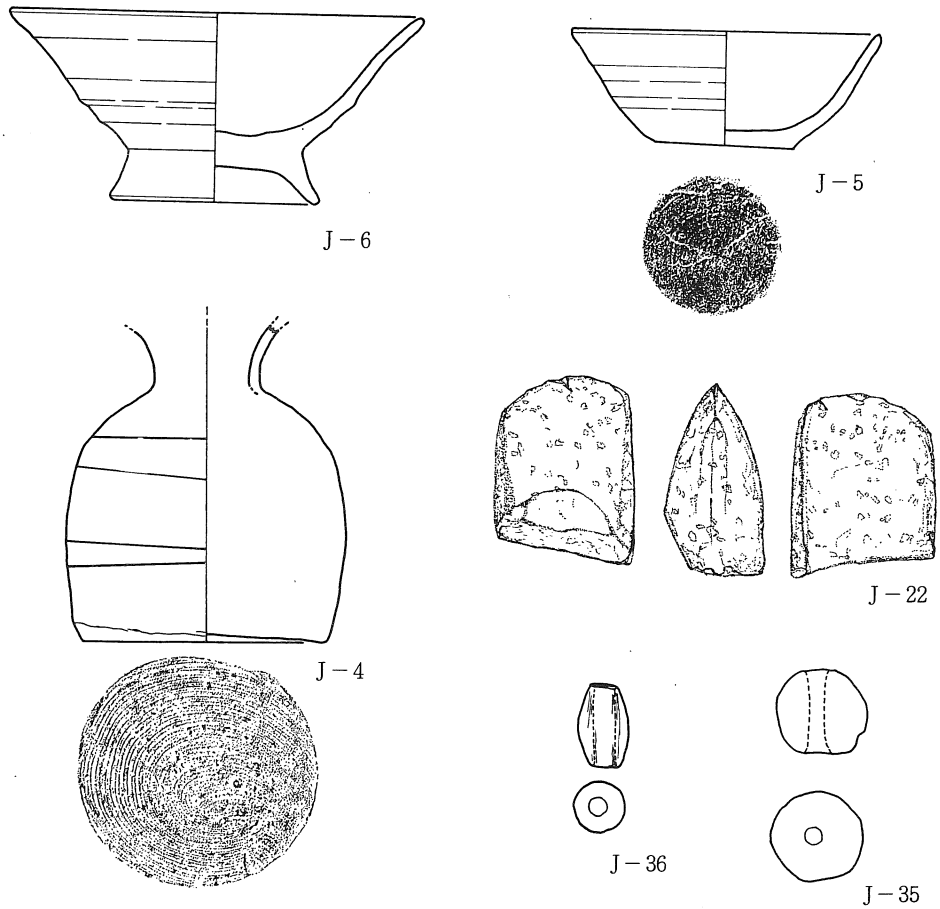
第26図　池ノ奥２号墳出土遺物実測図(1)　1/3



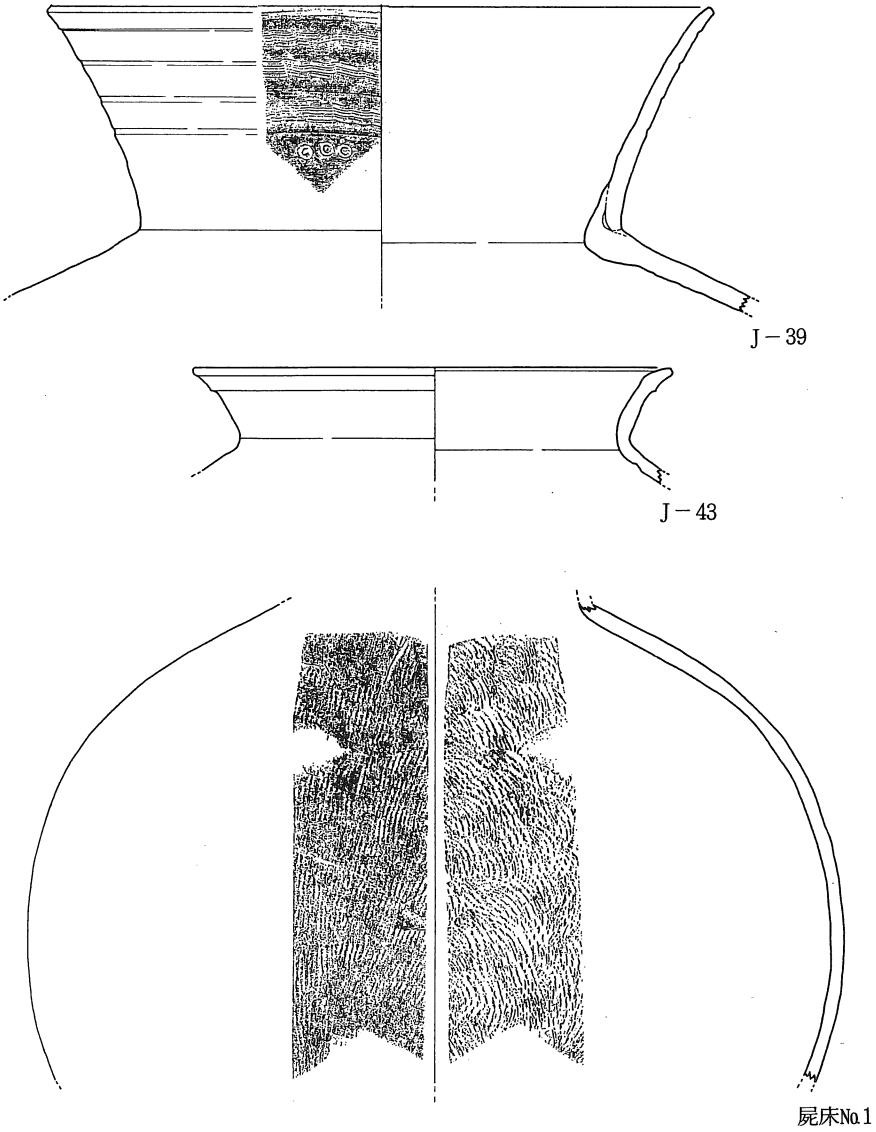
第27図　池ノ奥２号墳出土遺物実測図(2)　1/3



第28図　池ノ奥２号墳出土遺物実測図(3)　1/8



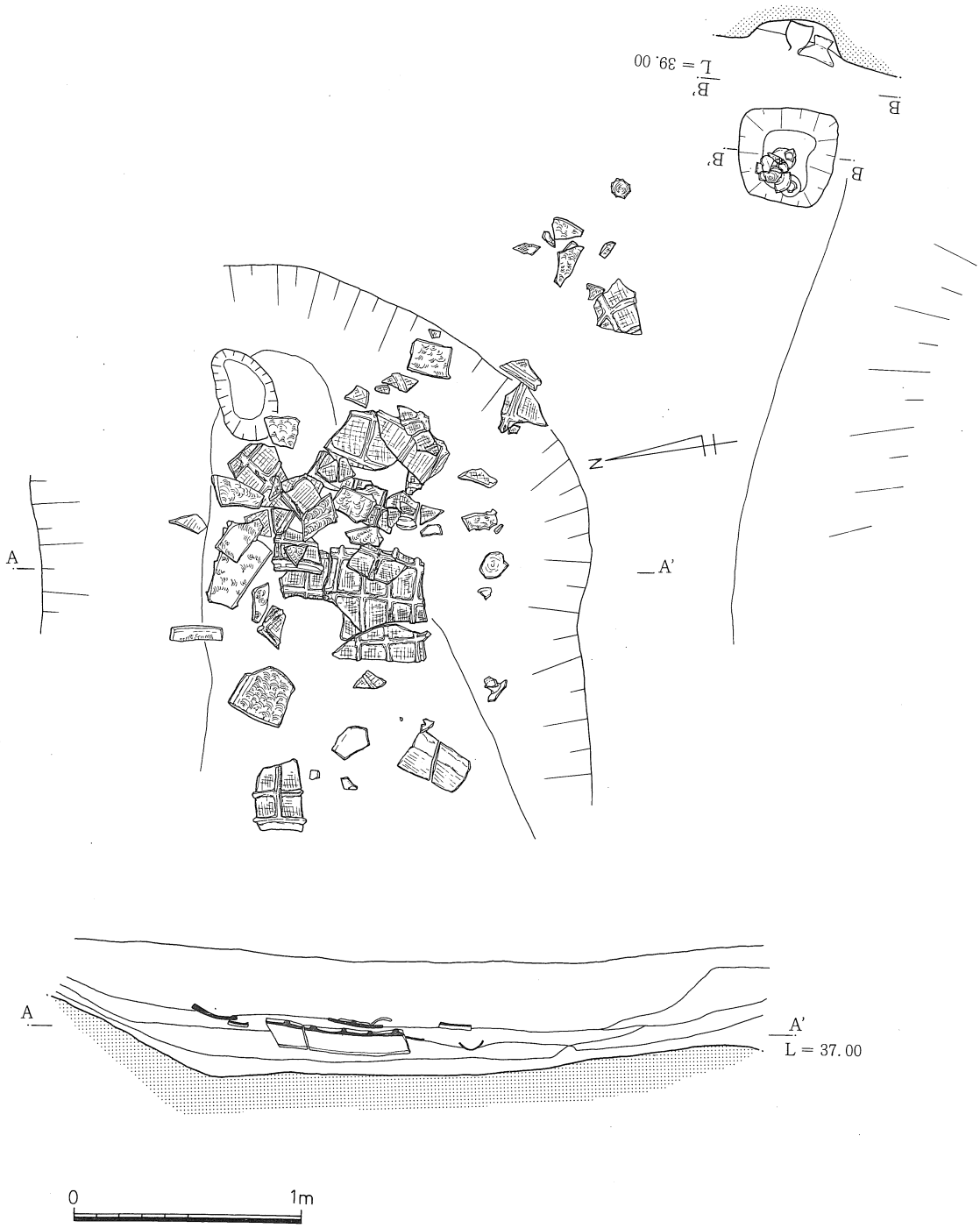
第29図　池ノ奥２号墳出土遺物実測図(4)　1/3



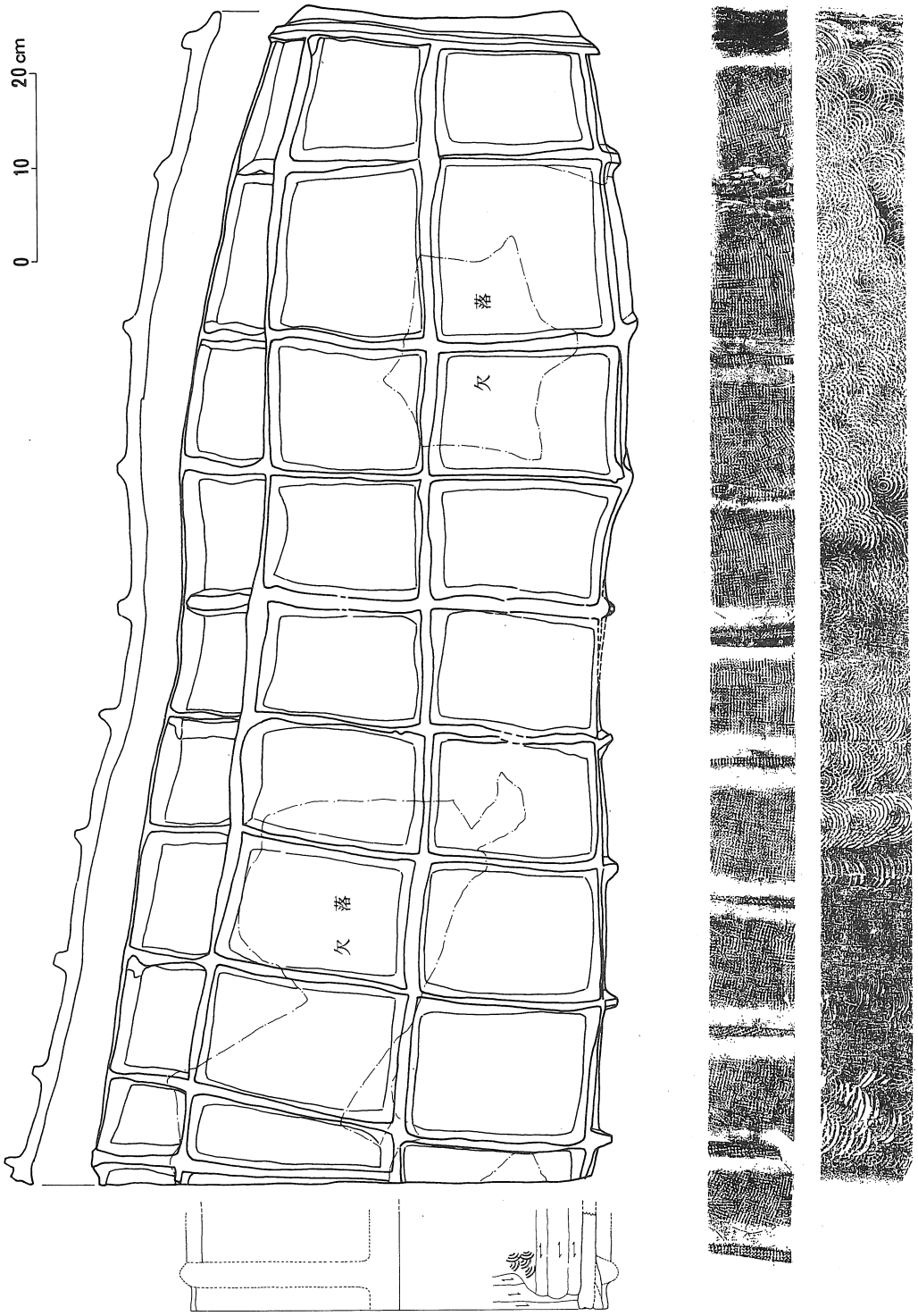
第30図　池ノ奥２号墳出土遺物実測図(5) 1/5

円筒棺は別個体の破片が７片あることから合口となっていた可能性が高く，しかもその出土状況から考えて，当初は円筒棺として近隣の地に埋置されていたが，何等かの理由で掘り起こされ，故意に破砕されて古墳の周溝内にその一部が投棄されたものと考えられる。

このような円筒棺は県内初例であるが，県外では古く讃岐国香川郡圓座村山崎の古墳の竪穴状石槨内に安置された甕棺の報告例がある。これは長さ４尺４寸とあるから，1.3m余りで，口径40cm前後，器表面に縦横の突帯を多く設けるもので，本例に最も近いものである。この円筒棺は特製のものであって，他地域からの影響が十分考えられる。



第31図　池ノ奥２号墳特殊円筒棺出土状況図



第32図　池ノ奥２号墳特殊円筒棺実測図

池ノ奥C遺跡出土の多数の円筒棺について検討したとおり，こうした極めて特殊な円筒棺は概して西暦7世紀代に集中しており，本例も確証は得られないが，池ノ奥2号墳の周溝完成後さほど時間をおかない段階に投棄されたものと考えられる。

その他の遺構　南側周溝には，上端径1.42m，下端径0.87m，深さ0.25mの円形の焼土壙が発見された。土壙上面で3～4片の須恵器片が検出されたが，焼土壙の内底面には遺物は無く，性格は不明である。

4. 小　結

イガラビ及び池ノ奥古墳群は，その立地から見て，同一の丘陵の尾根筋にいくつかの群を成して構築された古墳群である。更に隣接するイガラビ遺跡や池ノ奥遺跡及び池ノ奥窯跡群との関連が非常に深いと考えられるので，両古墳群を一括してその構築時期や構築順序を考察してまとめとしたい。

第2表　池ノ奥2号墳出土遺物一覧

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	その他
J−01	周溝内黒褐色土層中	坏身	11.2	3.5	立上がり0.5，角48.0°。上外方
J−02	1区円筒棺近辺出土	高坏			
J−03	1区第3層410−1，410−2	高坏			
J−04	1区周溝内SK02内	平底壺			回転糸切り痕
J−05	1区周溝内SK02内	平底坏	12.0	4.5	回転糸切り痕
J−06	1区周溝内SK02内	高台付坏	16.0	7.4	坏より碗に近い
J−07	玄室内(1)	坏蓋	9.4	3.8	
J−08	玄室床面№6	坏蓋(輪状つまみ)	14.3	3.0	
J−09	玄室内(18)	坏身	9.0	3.1	
J−10	玄室内(19)	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.0	2.8	
J−11	羨道部(20)	小形壺	10.8	10.0	平底。糸切り痕
J−12	519	坏身	11.6	3.6	立上がり0.0，角54.0°。上外方
J−13	1区周溝円筒棺近辺出土4	高坏			一段二方すかし
J−14	1区周溝円筒棺近辺出土63	高坏			二段すかし

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	その他
J−15	25・204	小形壺			
J−16	玄室床面№3	坏身	9.2	3.1	底部が平底に近く口縁単純
J−17	玄室床面№4	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.0	2.9	
J−18	玄室床面№2	坏蓋	9.8	3.8	
J−19	玄室床面№1	坏身	9.0	3.0	立上がり0.0，角62.5°。上外方
J−20	玄室床面№5	坏身	10.2	3.9	口縁部がくびれるタイプ
J−22	187	磨製石斧			約半分残か。
J−23	前庭部19	坏蓋	9.2	3.8	口縁部外面に箆記号。
J−24	1区周溝黒褐色土69・5	広口壺			平に近い底部
J−25	184・46	坏蓋	10.4	4.1	短頸壺蓋タイプ
J−26	164	盤	22.0	2.6	糸切り後ナデ痕跡
J−27	90・291	高坏	9.0	7.2	
J−28	53	坏蓋(擬宝珠つまみ)	12.2		受部の部分のみ。おそらく擬宝珠
J−29	249	坏蓋(輪状つまみ？)	16.0		口径から見ておそらく輪状つまみ？
J−30	269	坏蓋(擬宝珠つまみ)	11.0		受部の部分のみ。おそらく擬宝珠
J−31	234	瑕	7.6		口縁部のみ
J−32	5	平底坏			回転糸切り痕
J−33	492	高台付坏			回転糸切り痕
J−34	210	坏蓋	9.0	3.85	短頸壺の蓋
J−35	303	土玉	3.25	3.4	
J−36	第3区表採1	土錘	2.1	3.3	
J−37	前庭(41)	高坏	8.6	7.4	二方すかし
J−38	123・170	高台付皿？			高台付の皿か盤
J−39	池2～池C	甕			
J−40	3区C−6，N1.7・E4.55	高台付坏			
J−41	前庭部	長頸壺	7.55		口縁部。
J−42	B−5，4区周溝外上方	坏蓋			擬宝珠つまみ。516
J−43	192・258・319	甕	31.4		自然釉付着。
J−44	B−5表採34	坏蓋			輪状つまみ。
J−45	B−8第2層	平底坏			224

イガラビ及び池ノ奥両古墳群の立地を見ると，近接して群を成した数グループに分かれている。すなわち，西側丘陵斜面にあるイガラビ１～３号墳と，その東側にあるイガラビ４～８号墳，更に南に伸びる尾根上及び斜面に構築された池ノ奥１～２号墳の三つの支群である。次にそれぞれの古墳群をその立地条件と標高差から検討を加えてみる。

第一に，池ノ奥１号墳はこれらの古墳の中で唯一尾根上に構築されていることから，他の古墳とは分類されるものと考えられる。第二に，イガラビ１号墳と２号墳は非常に近接して構築されている。３号墳は同一斜面に構築されているが，１・２号墳とは標高差にして約５ｍ下位にあり，一見して同じ支群とは言いがたい。また，後述のごとく石室の構造から見ると分類可能であると考えられる。

以上のことからこれら10基の古墳は，イガラビ１・２号墳とイガラビ３号墳及びイガラビ４～８号墳，池ノ奥１号墳，池ノ奥２号墳の５つのグループに分類出来るものと考えられる。この５つのグループを墳丘及び石室の形態と出土遺物から相互比較して，構築順を検討してみたい。

まず，墳丘と石室の規模を見てみると，池ノ奥１号墳が最も大きい。尾根上に構築されているという特徴をも考えあわせると，本古墳が盟主的存在であることが想像される。イガラビ１・２号墳と池ノ奥２号墳は，やや石室が小型化し墳丘規模も小さい。いずれも追葬された可能性があり，特にイガラビ１号墳は陶棺の出土状況からも追葬は明かであると考えられるがその時期は不明である。イガラビ４～８号墳の石室の構造は玄室が単純化され羨道部や蓋石の状況が明瞭でないなど簡略化された単葬墓の可能性がきわめて強いもの

第３表　イガラビ・池ノ奥古墳群一覧

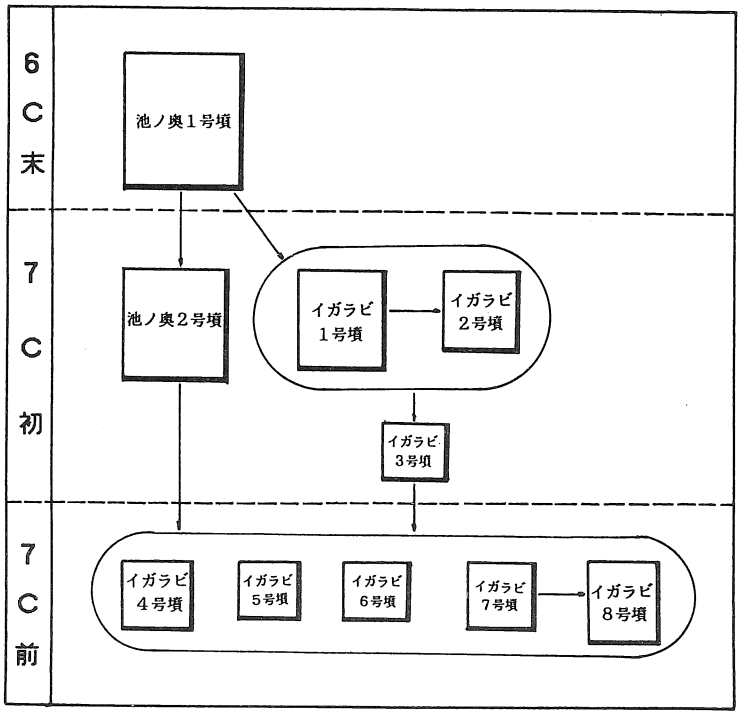
名　　称	墳丘規模 東西×南北×高さ	墳形	主体部 幅×奥行×高さ	出土遺物	備　　考
イガラビ１号墳	7.5 × 8.0 ×1.84	方墳	横穴式石室 (1.7 ×1.1 ×1.4)	須恵器・陶棺・磚	追葬の可能性大
イガラビ２号墳	6.64× 6.4 ×7.2	〃	〃 (1.0 ×1.6 ×1.15)	須恵器片多数	追葬の可能性有り
イガラビ３号墳	4.7 × 4.1 ×0.9	〃	〃 (0.7 ×1.7 × ?)	玄室内に須恵器	〃
イガラビ４号墳	—	不明	小石室 (1.0 ×1.95× ?)	—	
イガラビ５号墳	4.5 × 4.0 ×0.3	〃	〃 (0.9 × ? × ?)	須恵器片若干	後世の追葬で破壊？
イガラビ６号墳	5.3 × 5.05×0.5	〃	〃 (1.1 ×2.80× ?)	須恵器片若干	
イガラビ７号墳	—	〃	—	—	
イガラビ８号墳	5.5 × 7.0 ×0.8	〃	小石室 (0.9 ×2.6 × ?)	須恵器片若干	
池ノ奥１号墳	10.0 ×12.0 ×1.0	方墳	横穴式石室 (2.35×2.05× ?)	須恵器・子持壺・渡銀環	根石のみ残存
池ノ奥２号墳	9.0 × 9.4 ×0.5	略方	〃 (1.28×1.85×1.08)	須恵器・特殊円筒棺	須恵器の屍床あり

である。これは一般的に石室を有する古墳の形態の中では最終段階に当たるものとされている。

イガラビ３号墳の玄室床面から出土した遺物は，本古墳の石室構造に対して時期的に新しいものが多く含まれていると思われるので，初葬時の副葬品を全く取り去って新たに追葬した可能性が強いと考えている。また立地的にイガラビ１・２号墳の所在する同一斜面に構築されていることも注意される。本古墳の築造時期を須恵器によって他の古墳と比較する場合は伴出遺物のこうした不明確な点と，他の古墳においても比較する伴出遺物が少ないことから極めて困難であった。よって石室構造と追葬の可否及び立地的な条件から判断すると，本古墳はイガラビ４～８号墳のグループにより近い傾向を示してはいるが，むしろイガラビ１・２号墳からイガラビ４～８号墳に移行する過渡期的古墳であると考えている。

出土遺物からの検討は，池ノ奥１号墳の初葬時と思われる遺物以外はいずれも明瞭な形態変化をとらえる事が出来なかったことは前述したとおりである。しかし，イガラビ４～８号墳では伴出遺物が極めて少なくなり，かわりに８世紀以降と見られる須恵器片が本グ

第33図　イガラビ・池ノ奥古墳群相関図



ループの周辺でのみ多数発見されたことが興味深い。新たな古墳が構築されなくなった後に散布したと見られるこれらの須恵器は，後世の祭祀に関係したものと考えているが，この時期の遺構が検出出来なかったので確証はない。

こうした検討をふまえ，出土須恵器の特徴と遺構の検出状況から構築順に絶対年代をあてはめたものが第33図である。池ノ奥１号墳の出土遺物から本古墳群の築造が始まったのはおおよそ６世紀末と思われ，その後池ノ奥２号墳とイガラビ１号墳・２号墳が相前後して構築された。７世紀初頭～７世紀前半にイガラビ３号墳が作られた後，イガラビ４～８号墳がほぼ同時に構築され，それ以後本丘陵では古墳が作られなくなったものと推定される。これらの時期は池ノ奥窯跡群で生産が行われ，そして中止された時期にほぼ並行しており，大井の須恵器生産集団に関係して構築された古墳群と考えてよいと思われる。

玄室の奥行きに比較して幅の広いＴ字形の石室で，各壁を一枚石を意識して構成する特徴は朝酌地方に特有の型式であると従来から指摘されている。本古墳群の南方約600ｍにある九日宮古墳群は５基の古墳のうち，１号墳と２号墳がこの特有の横長の石室を持っており，同様の石室を有する古墳は近隣に点在している。本古墳群の中でもイガラビ１号墳・池ノ奥１号墳がこの形式を持っている。これらのことから，本地域で群を構成する古墳の初期の段階では，いずれも横長タイプの石室が構築される傾向があるように思われる。しかし，イガラビ１号墳と２号墳のように，全く異なるタイプの石室を近接して構築するという変化が，何故必要であったか不明である。

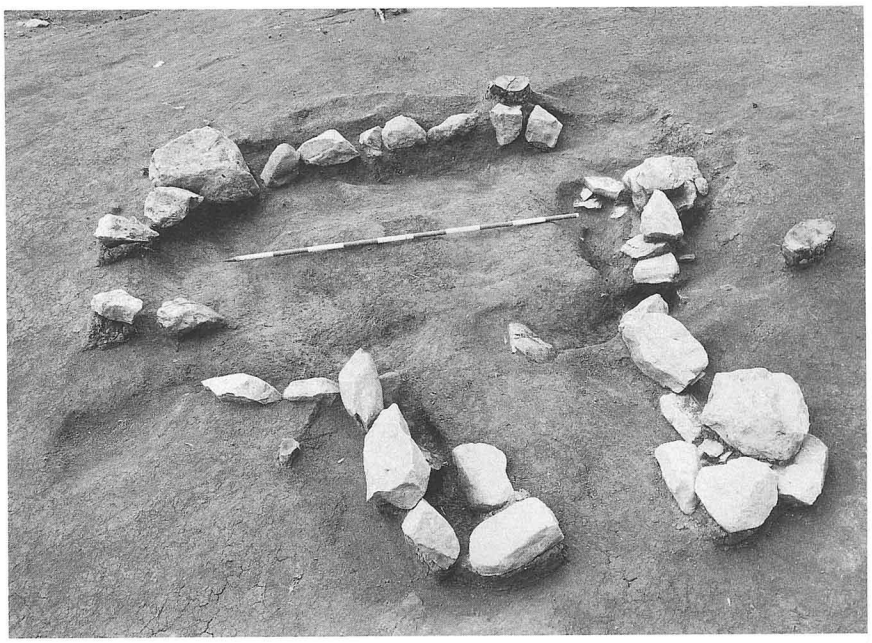
イガラビ・池ノ奥両古墳群は，多くの石室形態が近接して構築されており，石室の構造的な変化をとらえる上で極めて有意義な古墳群であるが，本地域で更に多くの調査が成されることにより，Ｔ字形の石室を有する古墳の意義と構築された時期及び他の古墳との相対年代がより明確にとらえられるものと思われる。

参考文献

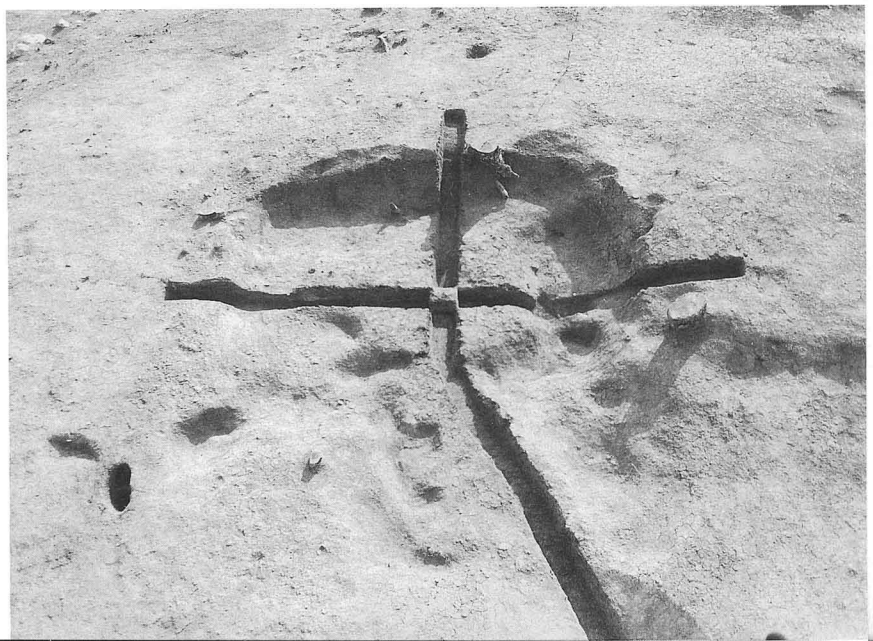
・「田辺古墳群墳墓群発掘調査概要」柏原市教育委員会 1987
・「横尾山古墳群発掘調査報告書」滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988
・「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984
・「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980
・出雲考古学研究会「松江・安部谷横穴墓群について(上)」八雲立つ風土記の丘№90

・出雲考古学研究会「松江・安部谷横穴墓群について(中)」八雲立つ風土記の丘№94
・出雲考古学研究会「松江・安部谷横穴墓群について(下)」八雲立つ風土記の丘№95
・山本　清「島根県文化財調査報告書第５集」1968
・門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説 ―特に四注式系横穴墓の分布と時期について―」(古文化談叢第７集) 1980
・大野嶺夫「岩崎千塚と周辺のＴ字形横穴式石室(上)」(古代学研究109) 古代学研究会 1985
・大野嶺夫「岩崎千塚と周辺のＴ字形横穴式石室(下)」(古代学研究110) 古代学研究会 1986
・東森市良「朝酌の古墳文化」(松江市立女子高等学校研究紀要第１号) 1970
・山本　清「山陰古墳文化の研究」1960
・野上丈助「古墳と古墳群の理解をめぐって」(考古学研究第19巻第１号)
・石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」(東アジア世界における日本古代史講座４)
・水野正好「群集墳の構造と性格」(古代史発掘６) 講談社
・「終末期の群集墳 ―西脇古墳群(姫路市西脇)―」(兵庫県埋蔵文化財情報ひょうごの遺跡９号) 1986
・岡崎雄二郎・瀬古 諒子「古墳時代末期の特殊土器片」(季刊考古学第21号)
・「二子14号墳発掘調査現地説明会資料」岡山県古代吉備文化財センター 1984
・「宝塚市雲雀山古墳群」宝塚市教育委員会 1975
・「シンポジウム青銅器の生産・終末期古墳の諸問題」日本考古学協会編 1988
・石野博信「回想・宝塚市長尾山の古墳調査」(たからづか第３号) 1986
・木下　忠「後期古墳群の諸問題」(考古学研究第９巻第１号) 1986
・佐田　茂「群集墳の形成とその被葬者について」(考古学雑誌第58巻第2号)
・石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」(論集終末期古墳) 1977
・「石棺式石室の研究」出雲考古学研究会 1987

池ノ奥１号墳調査前状況



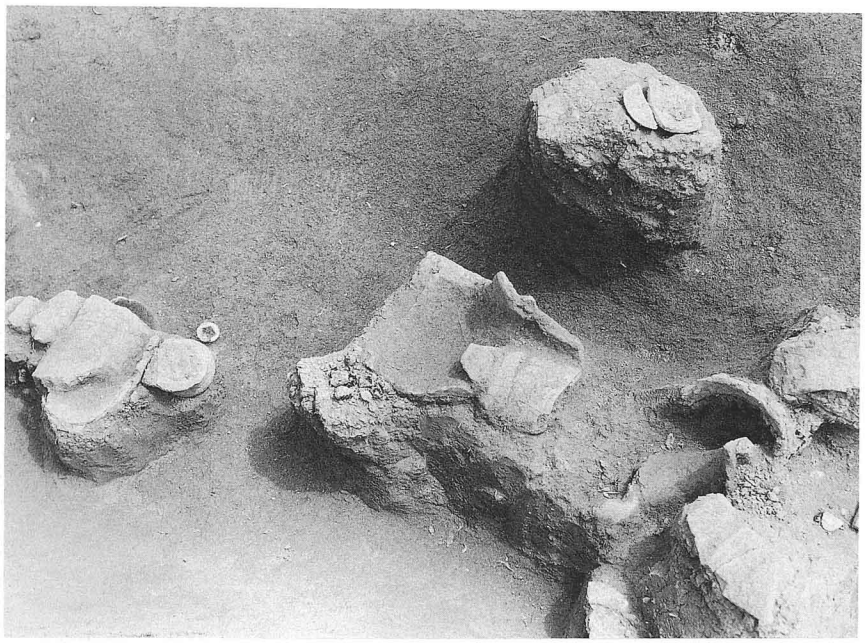
池ノ奥１号墳石室



池ノ奥１号墳
石室床面の調査状況

池ノ奥１号墳
前庭部遺物出土状況

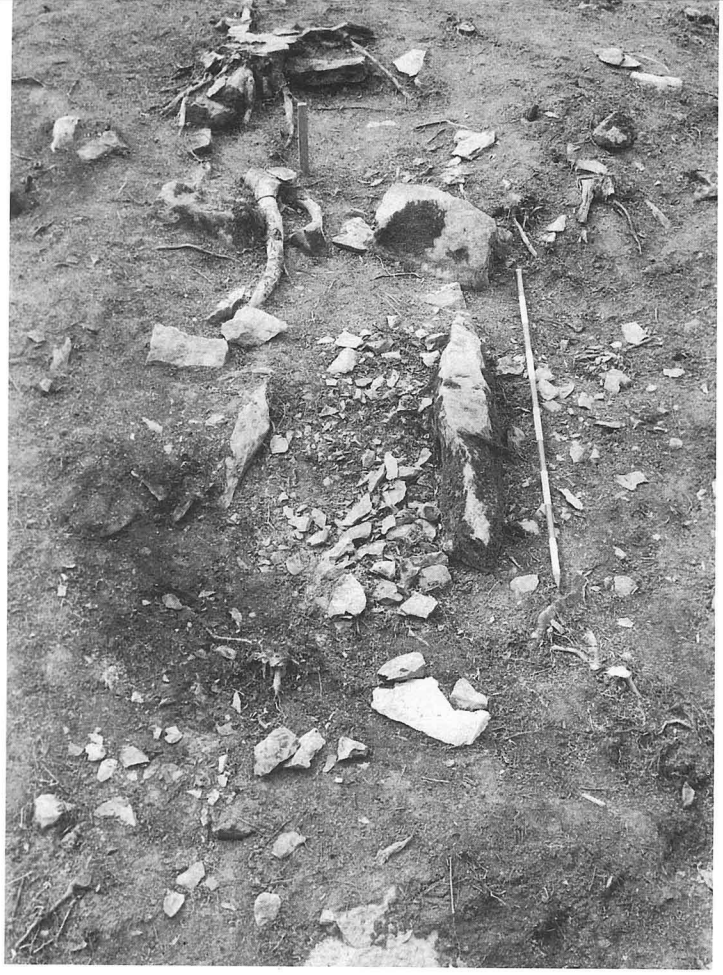
池ノ奥１号墳
甕片の散布状況



池ノ奥１号墳
前庭部子持ち壷出土状況

池ノ奥１号墳墳丘盛土状況

池ノ奥１号墳
ＳＫ０１，ＳＫ０２



池ノ奥2号墳調査前状況

池ノ奥2号墳墳丘と石室